土地改良事業実施区内
埋蔵文化財発掘調査概報

清里南部遺跡群(III)

昭和55年度

前橋市教育委員会

目　　次

序 …… 1

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅱ　発掘調査の概要 …… 4

1　発掘調査の方法…… 4
2　発掘調査の経過…… 4
3　地　　層…… 5
4　遺構及び遺物…… 5

Ⅲ　ま　と　め ……26

1　遺　　構……26
2　遺　　物……27

Ⅳ　結　　び ……30

例　　言

1. 本書は、前橋市清里南部土地改良事業に伴う発掘調査の概報である。
2. 調査主体者　　前橋市教育委員会、前橋市土地改良実施区内埋蔵文化財発掘調査団
3. 調査担当者及び調査期間等

　所 在 地　　前橋市青梨子町字下東西178番地　他36筆
　調査期間　　昭和55年５月13日～昭和55年10月11日
　担 当 者　　社会教育課文化財保護係主事　川崎　始　　杉浦つや子
　調査面積　　11,000㎡

4. 本書の執筆は担当者が分担し、遺物整理、図面整理、図版作製、遺物写真等は、調査担当者および、吉田公夫、柴崎まさ子が分担した。
5. 発掘調査にあたっては、土地改良課、清里南部土地改良区の関係者の他に下記の作業員の方々の協力があった。

吉田公夫	辻　みつる	萩原美千子	今城美智子
関根イセ	粟岡エミ子	松下ヒロ	高橋京子
大谷惣太郎	関根ケサ子	田村和子	桜井千枝子
田村友一郎	関根千枝子	高橋静子	関根シノブ

　他青梨子町・総社町の方々

序

近年、農業の近代化がすすむにつれ、農地の効率的利用を目的とした土地改良事業がさかんであります。これら事業と埋蔵文化財保存の問題は常にうらはらの関係にあり、当教育委員会にあっても、文化財保護の立場から、両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する清里南部遺跡群もその一つで、道路部分及びやむを得ず削平する部分について記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居を中心として、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料が数多く発見されました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始御協力いただいた農政部土地改良課及び清里南部土地改良区の方々、また直接調査に携わっていただいた作業員の方々に対して厚くお礼申し上げます。

昭和56年３月31日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

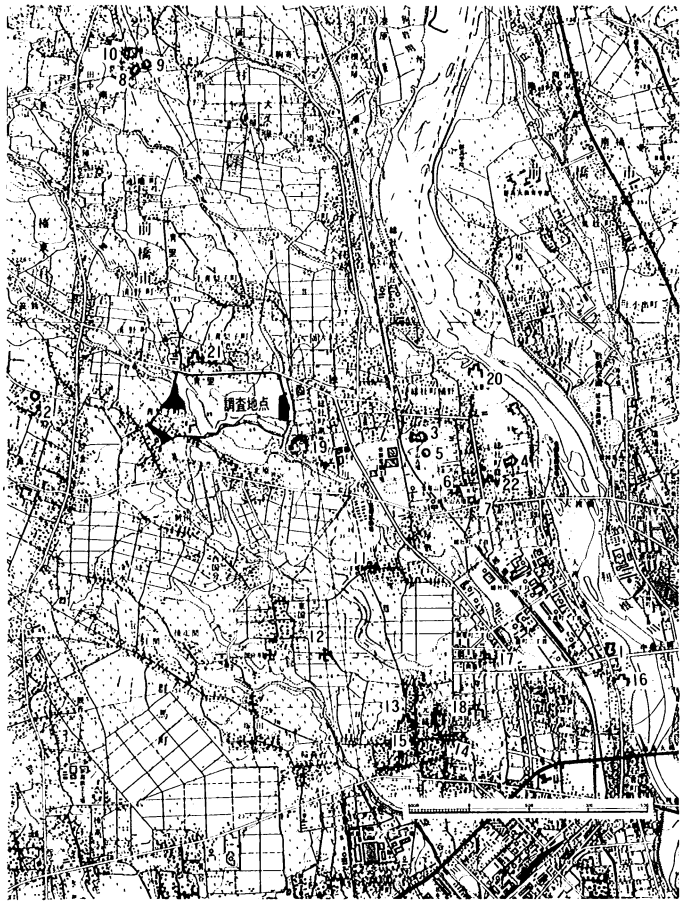
Ⅰ　遺跡の位置と環境

本遺跡地は榛名山東南麓、前橋市青梨子町の南に広がる、八幡川右岸の台地上（Ｉ区・Ｊ区）および、八幡川旧河道と思われる谷の北側緩斜面（Ｌ区・Ｍ区）に位置し、標高は約150ｍである。行政区画では、前橋市青梨子町、前橋市総社町高井に属する。

本遺跡地付近は、以前から縄文土器の散布地および古墳の分布地として知られていたが、昭和54年度の２度に及ぶ発掘調査の結果、竪穴住居52軒をはじめとして、平安時代から近世に及ぶ遺跡地であることが判明した。

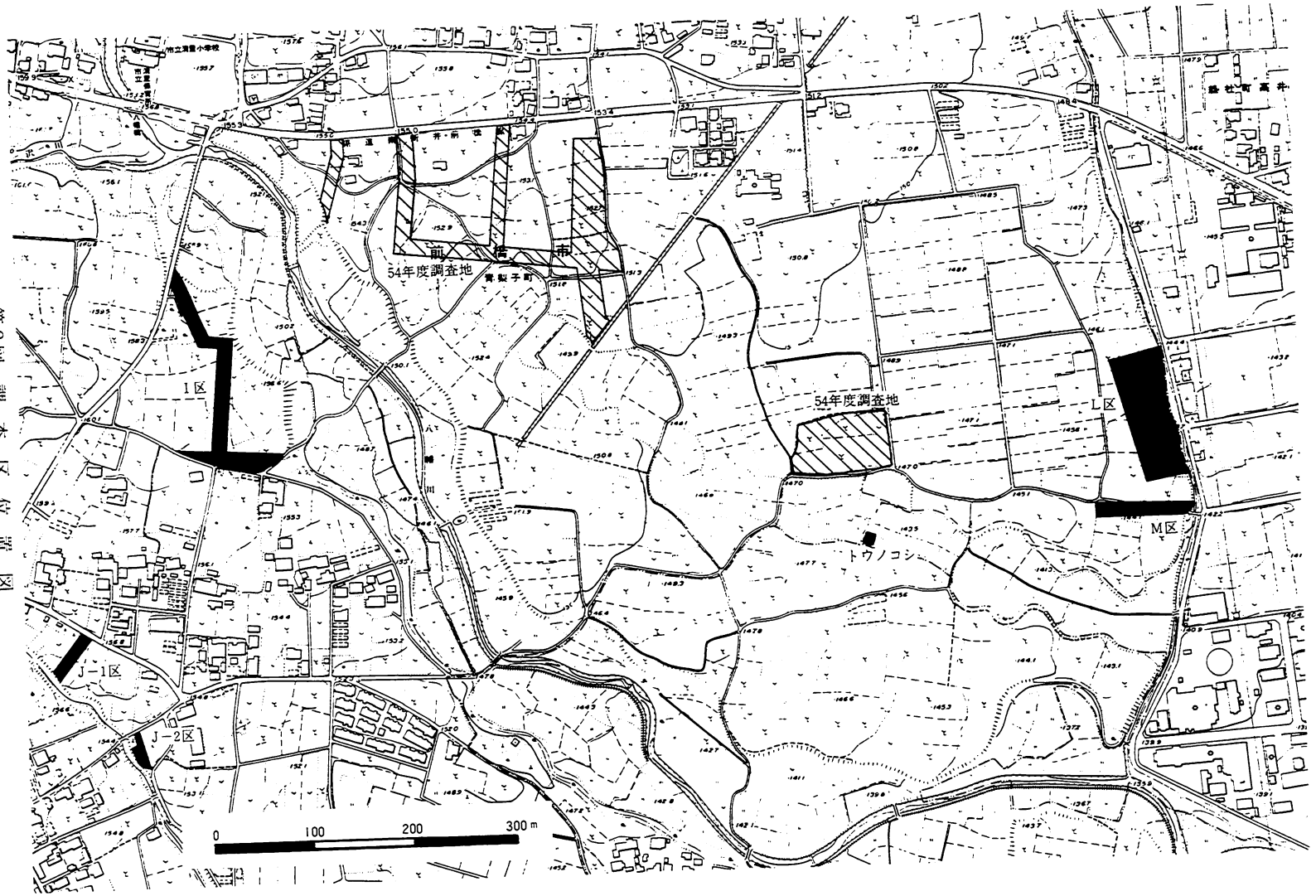
周囲の歴史的環境（第１図）を見ると、古代では東２㎞総社古墳群や北2.5㎞南下古墳群が、南方約２㎞には山王廃寺跡、国分寺跡、国府跡等がある。中世では、蒼海城、勝山城等の城館址が多数存在し、檜田城、青梨子の砦は遺跡地に隣接する。また、梵鐘や石製層塔に名残りを止め、戦国時代に戦乱によって廃絶したといわれる(伝)高井東覚寺跡も存在する。近世に入ると、総社城の築城に伴い、遺跡地東方付近にあった高井村は寛永15年（1638)、現在地に移転している。

以上にみられるように、本遺跡地付近は、上野国の古代から近世の歴史を知る上で注目すべき地域といえる。



古代	１王山古墳　２高塚古墳　３総社二子山古墳　４遠見山古墳　５総社愛宕山古墳　６宝塔山古墳　７蛇穴山古墳　８南下Ａ号古墳　９南下Ｂ号古墳　10南下Ｅ号古墳　11山王廃寺跡　12国分寺跡　13（推定）国府跡　14総社神社
中世	15蒼海城跡　16石倉砦跡　17大友館跡　18村山城跡　19檜田城跡　20勝山城跡　21青梨子の砦跡
近世	22総社城跡

第１図　周辺の遺跡分布図



第2図 調査区位置図

II　発掘調査の概要

1　発掘調査の方法

本発掘調査は、清里南部土地改良事業に伴う埋蔵文化財の事前調査で、55年度土地改良事業施工部分について実施した。今次調査は、54年度に続く第３次調査である。

調査箇所は、事前の表面調査により、遺物が濃密に散布する地域のうち、河川改修（Ｌ区）、道路（Ｉ区、Ｊ区、M区）及び水田転換地（トウノコシ）に予定される地域とした。

事前の表面調査及び前回、前々回の発掘調査で、竪穴住居を中心とする遺構の存在が予想された。調査は各区毎に行ったが、原則としてトレンチによる試掘により遺構の存在が確認された部分について全面的な調査を行った。

Ｉ区　幅６ｍの道路の中央に、８ｍ間隔に２ｍ×２ｍのトレンチを設定し、遺構の存在が確認された南半部について、重機により遺構確認面まで排土を行った。

Ｊ区　Ｉ区同様トレンチにより遺構の存在が予想されたＪ―１区北半部を重機により排土した。

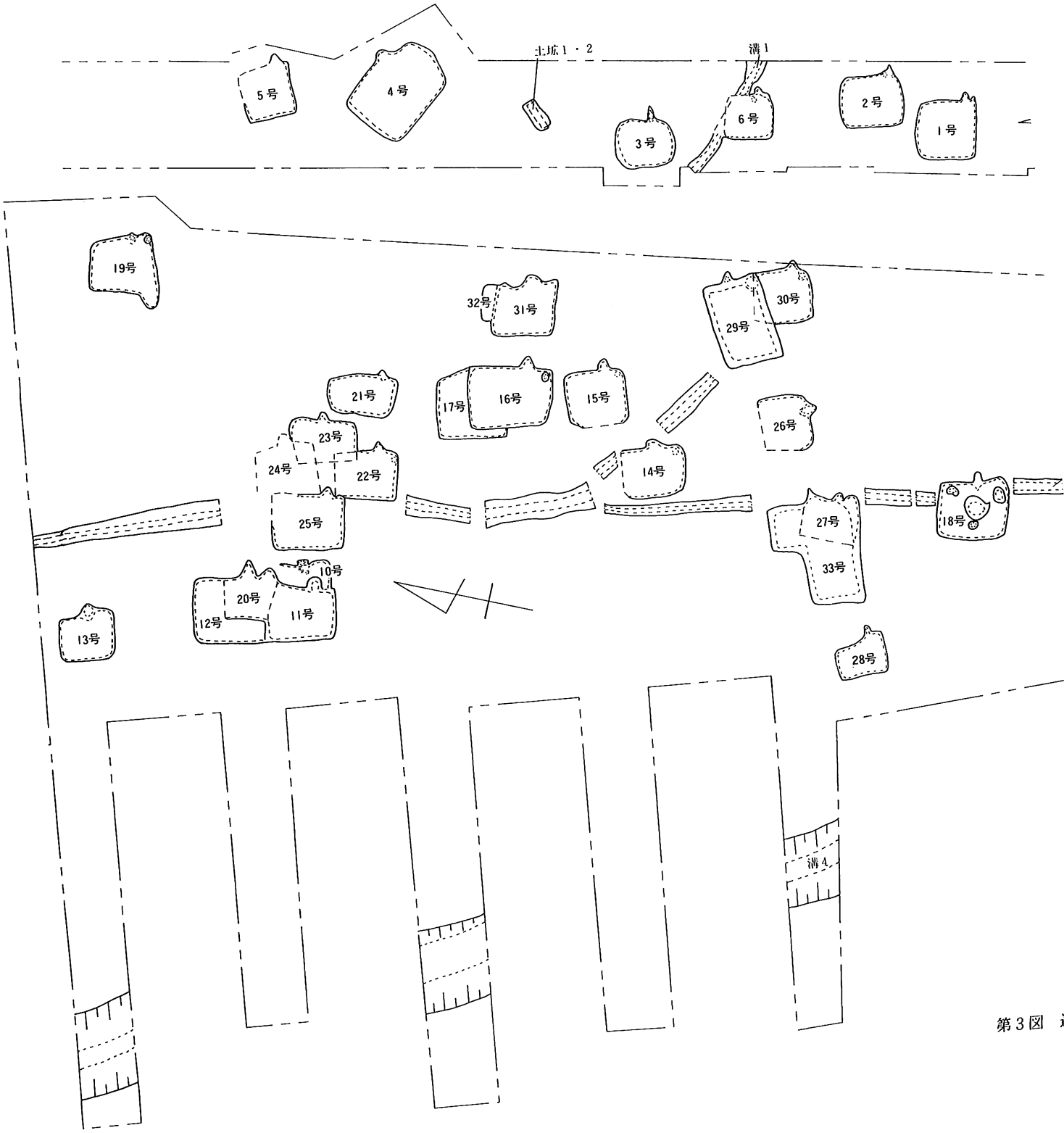
Ｌ区　南北に長いＬ区に、８ｍ間隔に幅２ｍのトレンチを東西に貫く形で設定した。Ｌ区西半部は、トレンチでは溝１条が確認されたのみで遺構はほとんどなく、かつ、河川改修工事の施工方法の変更により、遺構の密集する東半部分のみについて全面調査した。

M区　道路部分なので、Ｉ区同様試掘トレンチで遺構確認を行い、その後、中央の一部を除き全面調査した。なお、M区中央の約60㎡は、地権者の了承が得られなかった。

2　発掘調査の経過

本調査に先だって昭和54年10月13日～12月27日（第１次調査）、昭和55年２月４日～３月21日（第２次記査）が行われている。その結果、古代から近世に及ぶ遺跡であることが判明した。

５月13日　機械搬入Ｉ区試掘区設定
　17日　Ｉ区試掘開始
　24日　Ｉ区遺構排土開始
　29日　Ｊ―１区試掘開始
６月３日　Ｊ―２区試掘
　17日　Ｌ区へ事務所移転
　19日　Ｉ区・Ｊ区完了
　28日　トウノコシ試掘開始
７月16日　Ｌ区重機による試掘開始
　18日　トウノコシ精査開始
　25日　Ｌ区東半部分重機による全面排土開始、30日まで
７月29日　トウノコシ完了
　31日　Ｌ区遺構検出に並行して住居排土開始
８月中旬　Ｌ区住居精査段階
８月28日　M区試掘開始
９月２日　M区重機による排土、４日まで
　６日　Ｌ区完了
　11日　M区住居排土開始
　18日　M区住居等精査段階
10月２日　M区完了
　11日　残務整理終了


土坑1・2
溝1
5号
4号
3号
6号
2号
1号
19号
32号
31号
29号
30号
21号
17号
16号
15号
26号
23号
24号
22号
14号
25号
27号
18号
33号
10号
20号
12号
11号
13号
28号
溝4

第3図

溝5

7号

9号

溝2

溝3

42号

36号

34号

43号

41号

44・
45号

37号

39号

46号

40号

38号

溝6

土坑3

土坑4

土坑5

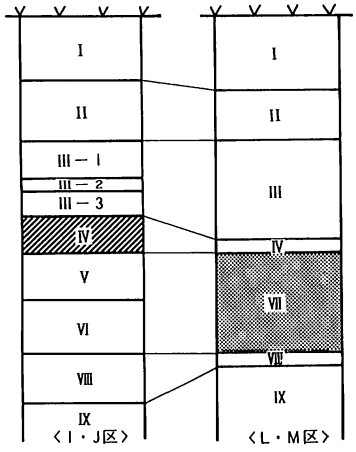
0

10(m)

図

3　地層（標準層位）

八幡川右岸台地（Ｉ・Ｊ区）と谷の北側緩斜面（Ｌ・Ｍ区）のものを図示すると、下図のとおりである。遺構および遺物との関係を述べると、土師器・須恵器使用竪穴住居跡の確認面は、Ⅳ層上面（Ｉ・Ｊ区）ないしⅦ層上面（Ｌ・Ｍ区）である。



第４図

Ⅰ　層：耕作土
Ⅱ　層：浅間山起源のＢ軽石を多量に含む灰褐色土。
Ⅲ$_{-1}$層：Ｂ軽石、二ツ岳系の軽石を含む黒褐色土。
$_{-2}$層：粘質淡赤褐色土（ＦＡ）
$_{-3}$層：ＦＡを多量に含む黒色土。Ｃ軽石を含む。やや粘質。
Ⅳ　層：Ｃ軽石を多量に含む黒色土。
Ⅴ　層：軽石を含まない暗褐色土。
Ⅵ　層：褐色土。
Ⅶ　層：粘質暗褐色土。水の影響を受けている。
Ⅷ　層：淡黄褐色土。
Ⅸ　層：灰黄色土。層状に砂礫層を含む。堅固。

4　遺構及び遺物

今次調査により検出した遺構は、竪穴住居跡45軒、溝６条、土坑５基で、総遺構数は57である。他に、(伝)東覚寺跡の「トウノコシ」が１地点ある。時代別には下表のとおりである。尚、主に本概報では、遺構の大半を占める竪穴住居の内、主要な遺構遺物について報告する。

第１表　時代別遺構一覧

	竪穴住居跡	土　坑	溝	計
古墳時代以前	0	0	1	1
奈良時代	8	2	0	10
平安時代	29	0	3	32
中　　世	0	0	1	1
近世以降	0	3	1	4
不　　明	8	0	0	8
計	45	5	6	56

第２表　竪穴住居一覧表

（重複関係→は旧→新の関係を示す）

番号	区	規模（長軸×短軸）面積	主軸方位	カマド（位置・形状等）	遺物類型	重複関係	備考
		m　m　m²					
1	I	3.46×3.35　11.59	N-13°-E	東壁南端、袖石、山石、内壁、ハガマ平瓦土釜使用	E		南東隅張出
2	I	3.52×3.13　11.02	N-10°-E	東壁南端、丸瓦、山石使用	E		南東隅張出
3	I	3.25×2.45　7.96	N-10°-E	東壁南寄	C		
4	I	5.46×3.78　20.63	N-28°-W	東壁南寄、凝灰岩使用	不明		２軒重複か、Ｂ類Ｄ類の遺物を出す
5	I	3.08×2.77　8.53	N-3°-E	東壁南寄	C		
6	I	2.9×2.1　6.09	N-13°-W	東壁南寄	C	溝１→6	
7	I	不明	N-17°-W	東壁、凝灰岩使用	B		全域確認できず
9	J	不明	N-20°-E	東壁	A	9→溝２	
10	L	不明	N-9°-W	東壁南寄、凝灰岩使用	C	10→11←12	
11	L	3.8×2.7　10.26	N-5°-W	東壁南寄、袖、山石、煙道、凝灰岩使用	D	10→11←12	
12	L	3.8以上×3.4　12.92	N-6°-W	東壁	C	11←12←20	
13	L	2.95×2.6　7.67	N-9°-W	東壁中央、凝灰岩使用、たき口前、穴	C		
14	L	3.19×2.88　9.18	N-12°-W	東壁南寄、たき口、鳥居状に凝灰岩使用	C		貯蔵穴、東南隅円形
15	L	3.95×2.55　10.07	N-10°-W	東壁南寄	D		貯蔵穴、東南隅円形
16	L	4.7×2.95　13.87	N-3°-W	東壁南寄、袖石、凝灰岩使用、たき口前に穴	D	17→16	貯蔵穴、東南隅円形
18	L	3.90×2.96　11.54	N-9°-W	東壁中央南寄	C		
19	L	3.58×2.68　9.59	N-12°-W	東壁南寄	C		西南隅に張出、貯蔵穴、東南隅不正円形
20	L	不明	N-3°-W	東壁	不明	12←20	カマドとコーナのみ
21	L	3.66×2.02　7.39	N-6°-W	東壁南寄、袖石、凝灰岩使用	D		
22	L	3.48×2.74　9.54	N-1°-E	東壁南寄	D	23→22	
23	L	2.82×2.36(推定)　6.66	N-2°-E	東壁南寄、袖石、凝灰岩使用	D	24→23→22	丸鞆裏座出土
24	L	不明	不明	東壁南寄、袖石、凝灰岩使用	D	24→23	
25	L	3.62×2.88　10.43	N-1°-W	東壁南寄	D	溝５→25→23	
26	L	3.08×2.10　6.46	E-12°-N	南壁東寄	C		
27	L	南北約2.5	N-1°-E	東壁南寄、袖石、凝灰岩使用	D	33→27	
28	L	2.80×1.84　5.15	N-17°-W	東壁南寄	C		
29	L	4.72×3.0　14.16	E-22°-N	東壁南寄	A		貯蔵穴、東南隅不整円形

30	L	2.96×2.90 8.58	N-7°-W	東壁、南寄、袖石、凝灰岩使用	C		貯蔵穴、東南隅円形
31	L	3.52×2.68 9.43	N-6°-W	東壁、中央	C	32→31	
33	L	南北4.6、東西5.26			A	33←27	
34	M	5.34×3.36 17.94	N-4°-W	東壁か	C	34→35	全域確認できず
36	M	2.32×2.20 5.10	N-4°-W	東壁、南寄、凝灰岩使用	C		
37	M	3.60×3.08 11.08	N-7°-E	東壁、南寄	C	40→37←43 ↑—46	
38	M	南北2.60	N-16°-W	不明	A	38→40	
39	M	東西2.24	N-6°-W	東壁、南寄	C		
41	M	東西4.60以上 南北2.30以上	E-28°-N	不明	A	41→43	
43	M	3.80×2.30以上	E-29°-N	不明	A	41→43→44	西壁、南寄にカマド状の張出
44	M	東西4.00以上 南北2.20以上	E-19°-N	不明	A	43→44→45	

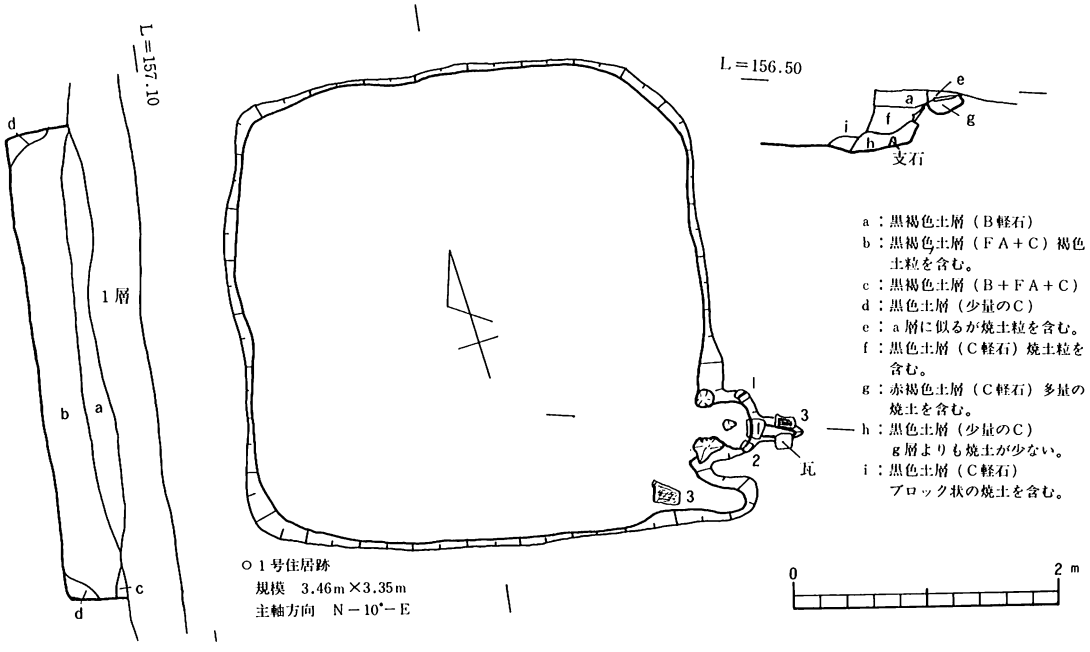
8号は欠番、17号、32号、35号、40号、42号、45号、46号は詳細不明。但し45号はA類。

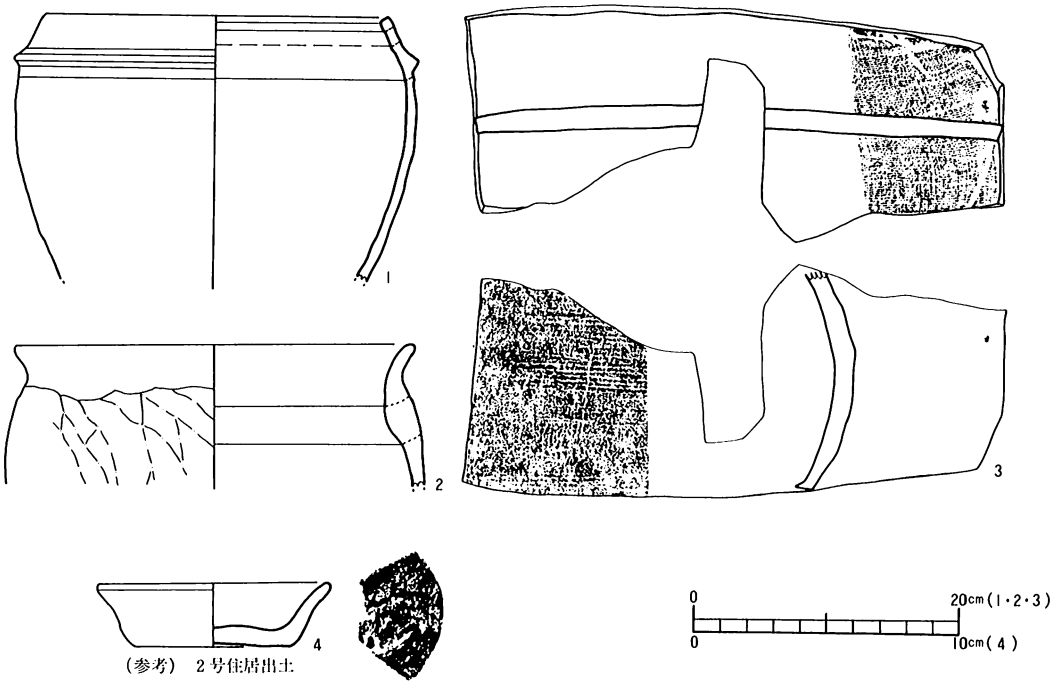
(1) I　区

台地東端の八幡川に臨む崖上に位置する。区の北部からは遺構は確認されず、南部から竪穴住居8軒、溝1条、近世以降の土坑2基を検出した。竪穴住居はいずれも国分期のものと思われ、1号、2号住居はB軽石層下のものである。

(a) 1号住居跡

カマドは南端に近く、カマドの南側の壁をやや東側に張り出した構造をもつ。瓦、土釜の





第5図　1号住居跡及び出土遺物

出土がある。また、1号住居と同様の構造をもつ2号住居跡からは、カワラケ状土器が出土した。

(2)　J—1区

安良田川北岸の道路部分で、南半は安良田川の氾濫原で遺構は認められず、北側から竪穴住居1（9号住居)、溝2条を検出した。このうち、溝3は水流の跡があり、埋土より元祐通宝を出土した（第6図)

第6図

(3)　J—2区

安良田川の氾濫原で、遺構は確認されなかった。

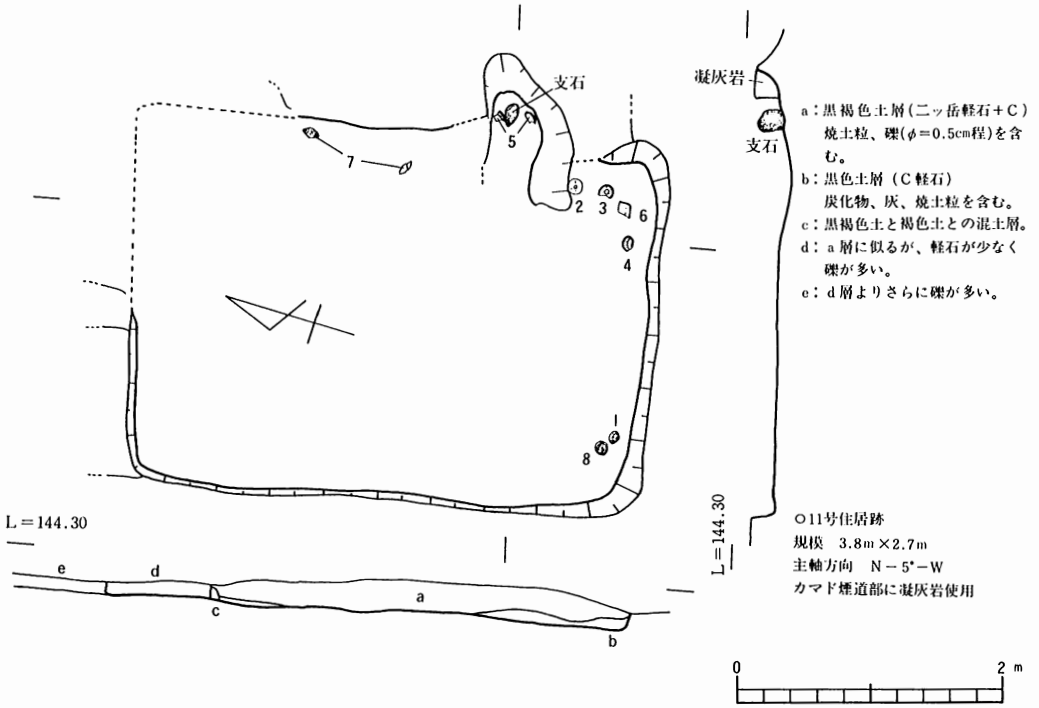
(4)　L　　区

東西堀を境に総社町高井に接する。竪穴住居跡24と溝2条を検出した。溝5は埋土に二ツ岳系の軽石を含まず、溝4はB軽石の純層を埋土上部に堆積する。また、竪穴住居のうち、16軒は何らかの重複があり、4軒重複が2ケ所ある。時代は、奈良時代から平安時代後期まであり、時代毎に小さな差違が認められる。

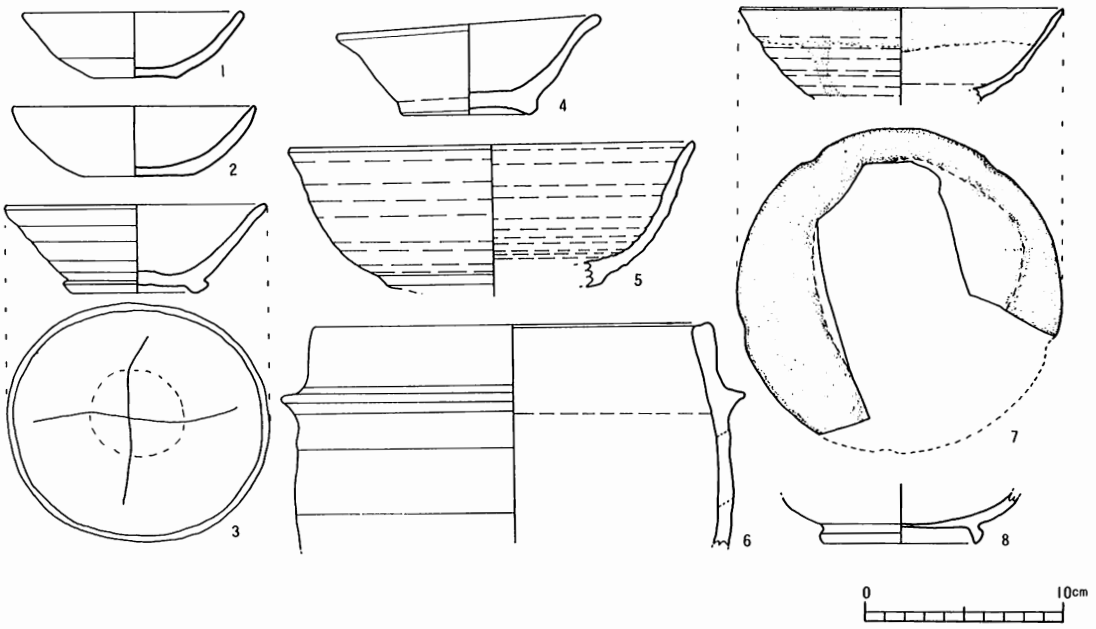
尚、L区は、M区とともに高井村の故地であった可能性が考えられたが、屋敷跡等は確認されなかった。

(a)　11号住居跡

10・12・20号住居と重複し、これらより後築。カマドは山石を使用し、煙道部には凝灰岩を用いている。貯蔵穴は無い。遺物は灰釉陶器が目立ち、須恵器の羽釜、雑なつくりの高台椀等があり、土師器は少い。



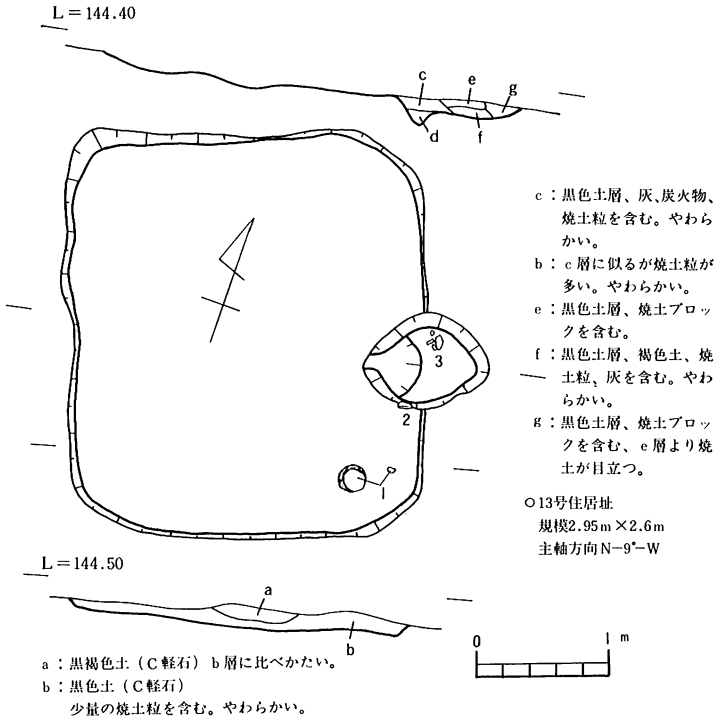
第７図　11号住居跡

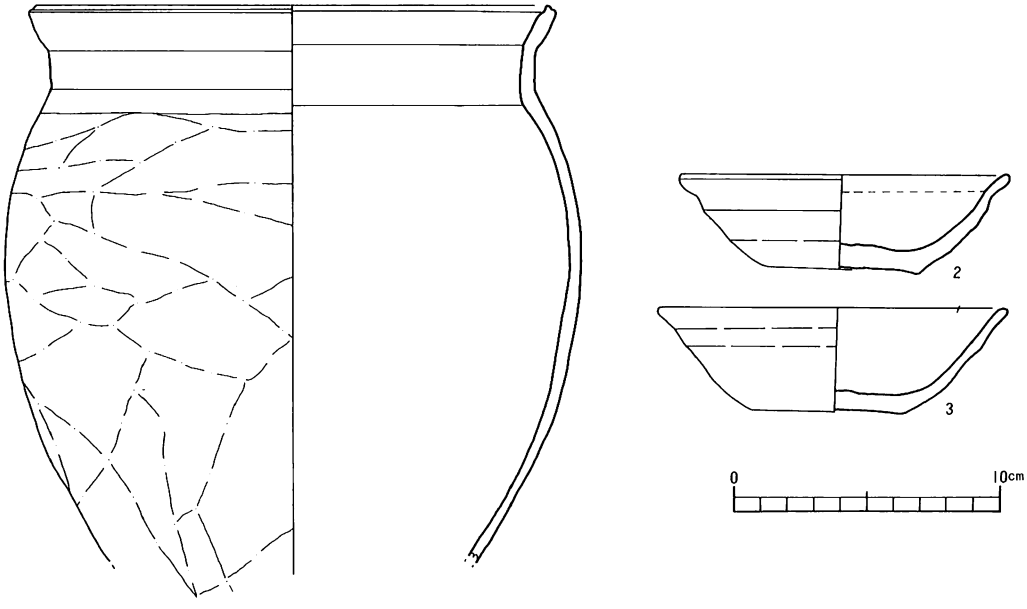


第８図　11号住居跡出土遺物

(b)　13号住居跡

カマドの位置が東壁中央やや南寄であるのが特徴的。貯蔵穴は無い。

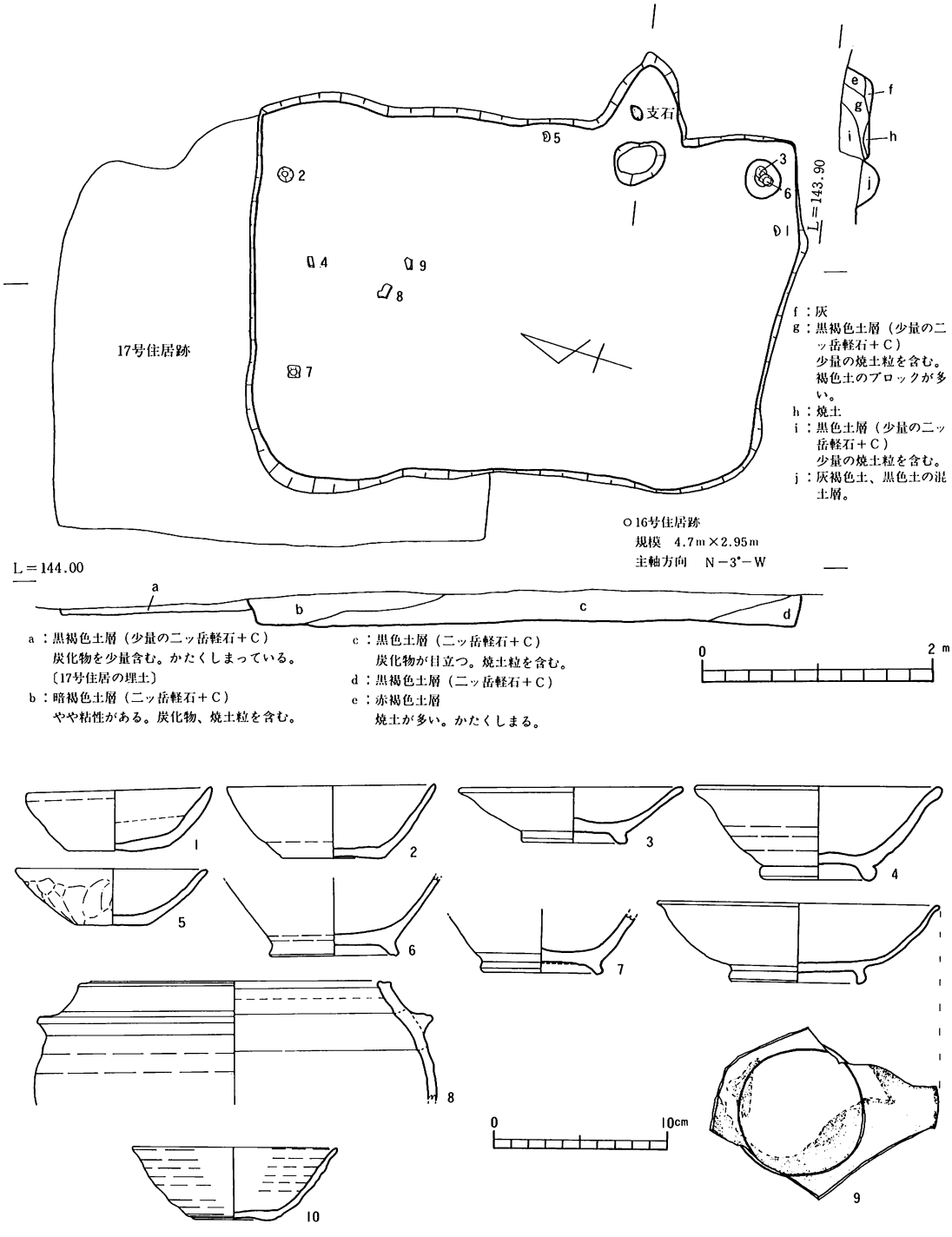




第９図　13号住居跡及び出土遺物

(c)　16号住居跡

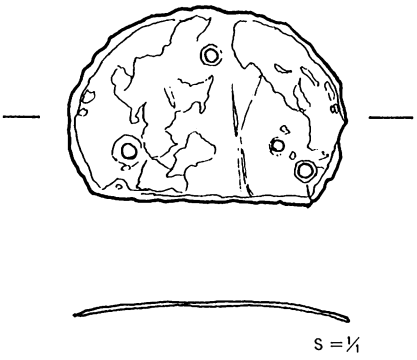
17号住居を切る。東南隅に円形の貯蔵穴がある。床面中央付近には、炭化物が広く散布していた。



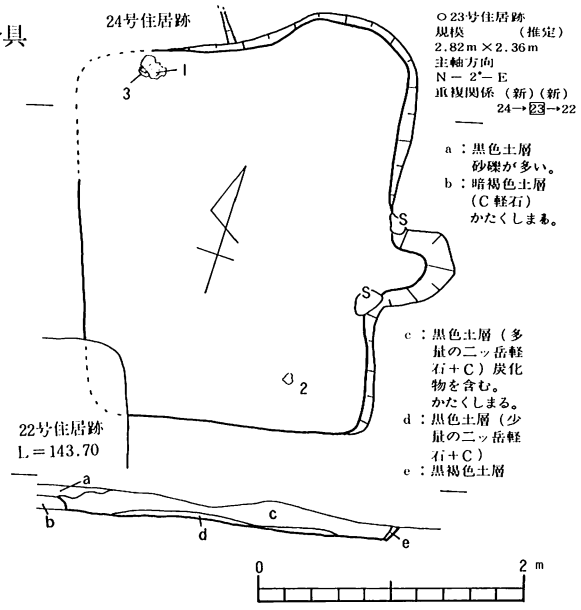
第10図　16号住居跡及び出土遺物

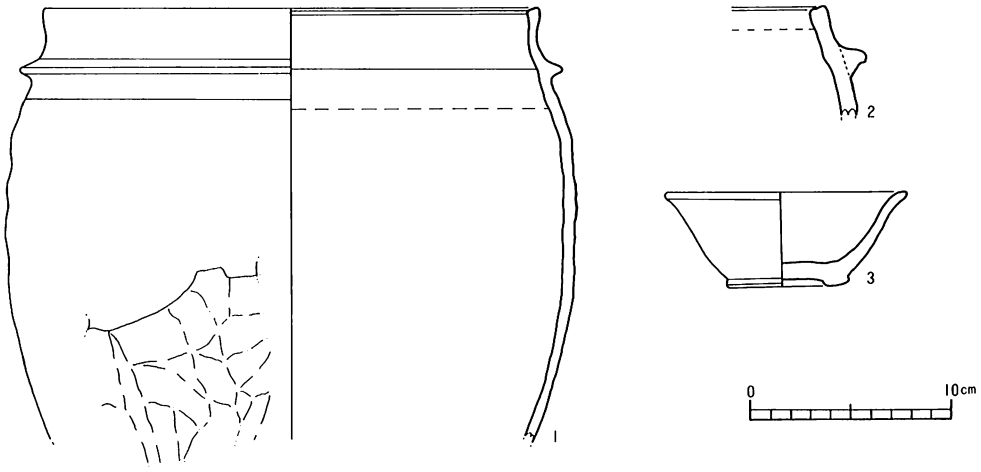
(d) 23号住居跡

24号住居跡を切り、22号住居跡に切られる。南壁は明瞭でなく、西壁と北壁の一部は推定。カマドは凝灰岩を鳥居状に組んだらしい。埋土中より、下図の金銅製帯金具（丸鞆裏座）を出土した。



第11図　23号住居跡出土金銅製帯金具





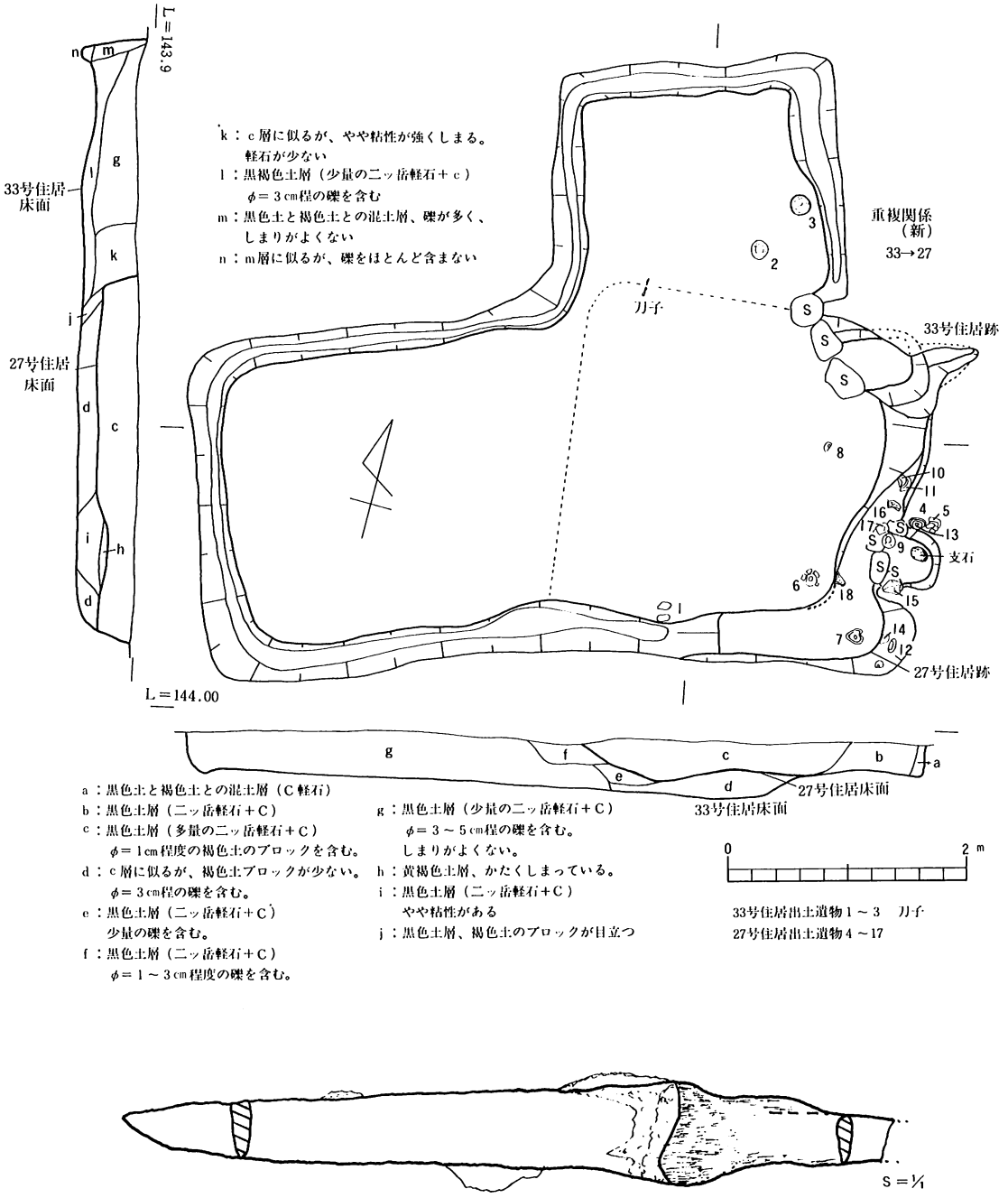
第12図　23号住居跡及び出土遺物

(e) 27号住居跡

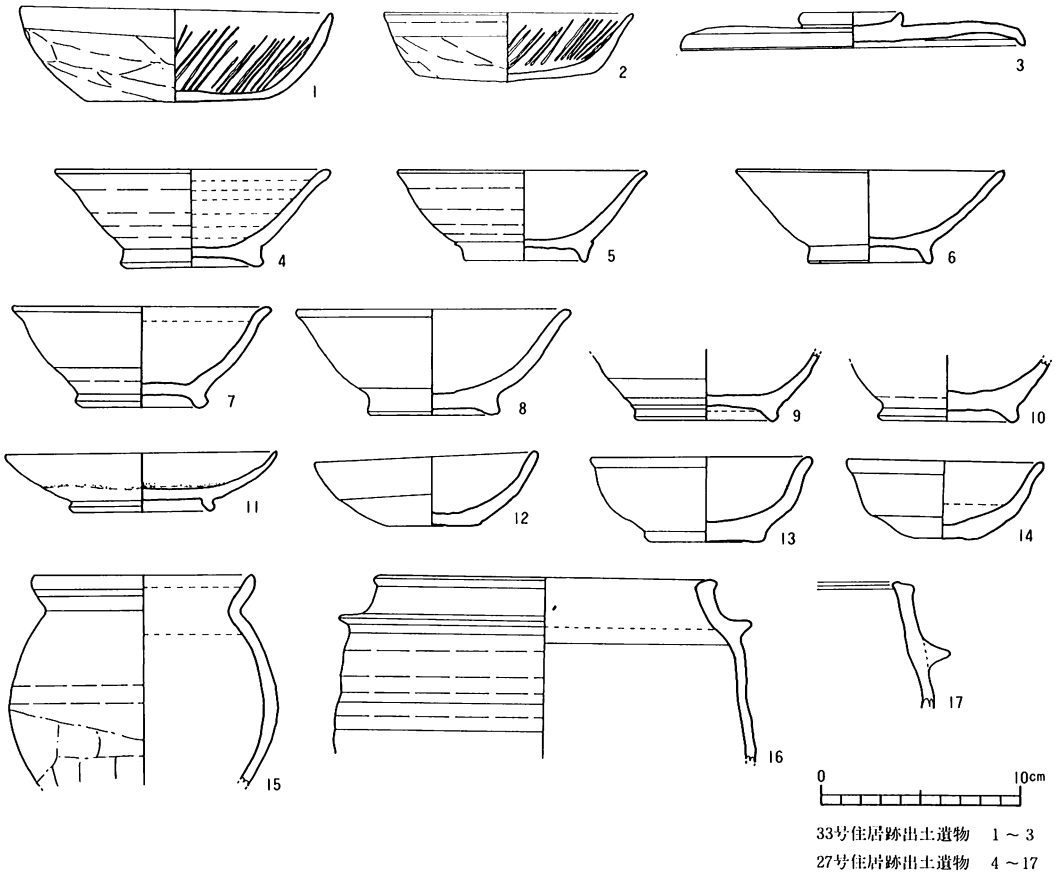
33号住居跡より後築。西壁と北壁は不明。11号住居跡とともに遺物が最も多く主にカマド周辺（壁外を含む）に集中する。写真8はカマド調査以前のものである。

(f) 33号住居跡

27号住居跡に東南隅を切られる。逆「L」字型の特異な構造で、周溝がまわる。カマドは大きく幅約1m、凝灰岩を鳥居状に組んでいる。出土遺物には、糸切未調整のものはみられない。



第13図　27・33号住居跡及び33号住居出土刀子



第14図　27・33号住居跡出土遺物

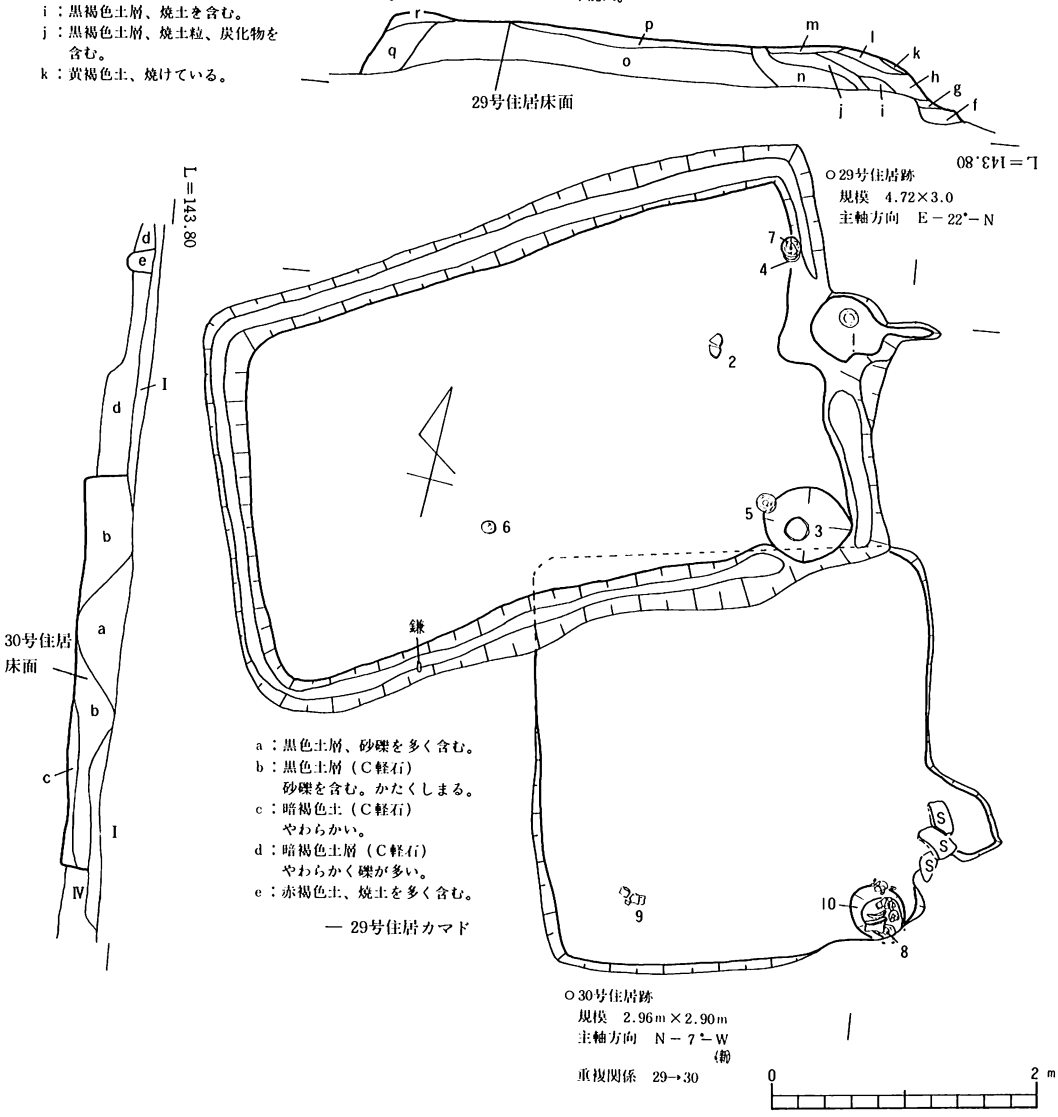
(g)　29号住居跡

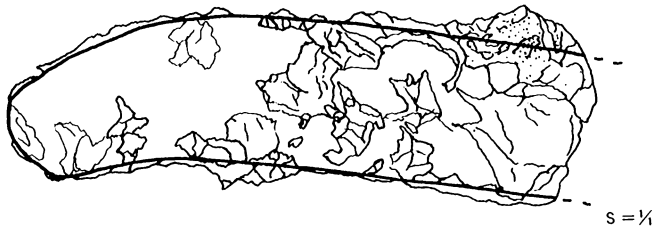
30号住居と重複し、南壁を切られる。東西軸を主軸とし、周溝を有する。南東隅の貯蔵穴より土師器の盤（第16図－3）を出土する。また、須恵器の蓋3個体を出土するがそのうちの1つは（第16図－7）土師器の坏（第16図－4）とセットになっていた。出土遺物には、糸切未調整のものは見られない。

(h)　30号住居跡

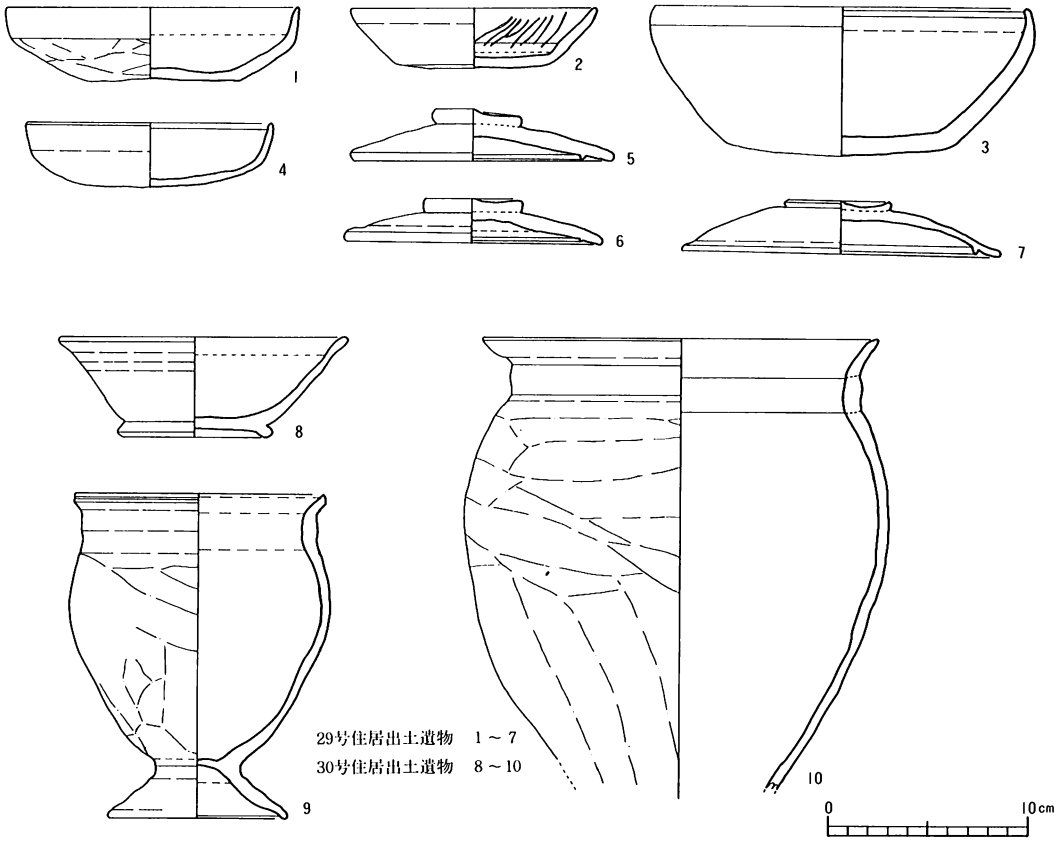
29号住居より後築。円形の貯蔵穴を南東隅に有し、内より「コ」の字状口縁の甕、高台椀を出土する。他に脚付甕の出土がある。またカマドには凝灰岩を使用していた。

f：黒色土層、焼土混入
g：黒褐色土層、やや焼けている。粒子が細かい。
h：黄褐色土と焼土との混土層
i：黒褐色土層、焼土を含む。
j：黒褐色土層、焼土粒、炭化物を含む。
k：黄褐色土、焼けている。
l：灰、黄褐色土、焼土の混土層
m：灰
n：暗褐色土層、焼土粒が多い。礫を含む。
o：黒色土層（C軽石）礫を含むしまりが悪い。
p：o層に似るが、黄褐色土が多く混入。
q：黒色土層、o層より礫が多い。
r：黒褐色土層、礫が多い。





第15図　29・30号住居跡及び29号住居出土鎌



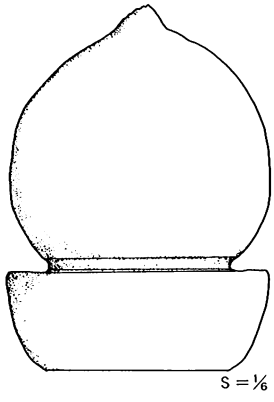
第16図　29・30号住居跡出土遺物

(5)　M　　区

八幡川旧河道と思われる谷に向かう傾斜地の端部付近に位置し、檜田城址に隣接する。ここでは、竪穴住居跡13、土坑３、溝１条（溝６）を検出した。

竪穴住居は、その伴出土器に、糸切未調整のものがみられないものが集中する。また、３基の土坑のうちの２基（土坑３・５）も、糸切未調整以前であり、他の１基は、溝６と同じく近世以降のものである。この溝の埋土からは、五輪塔の空風輪（第17図）が出土した。

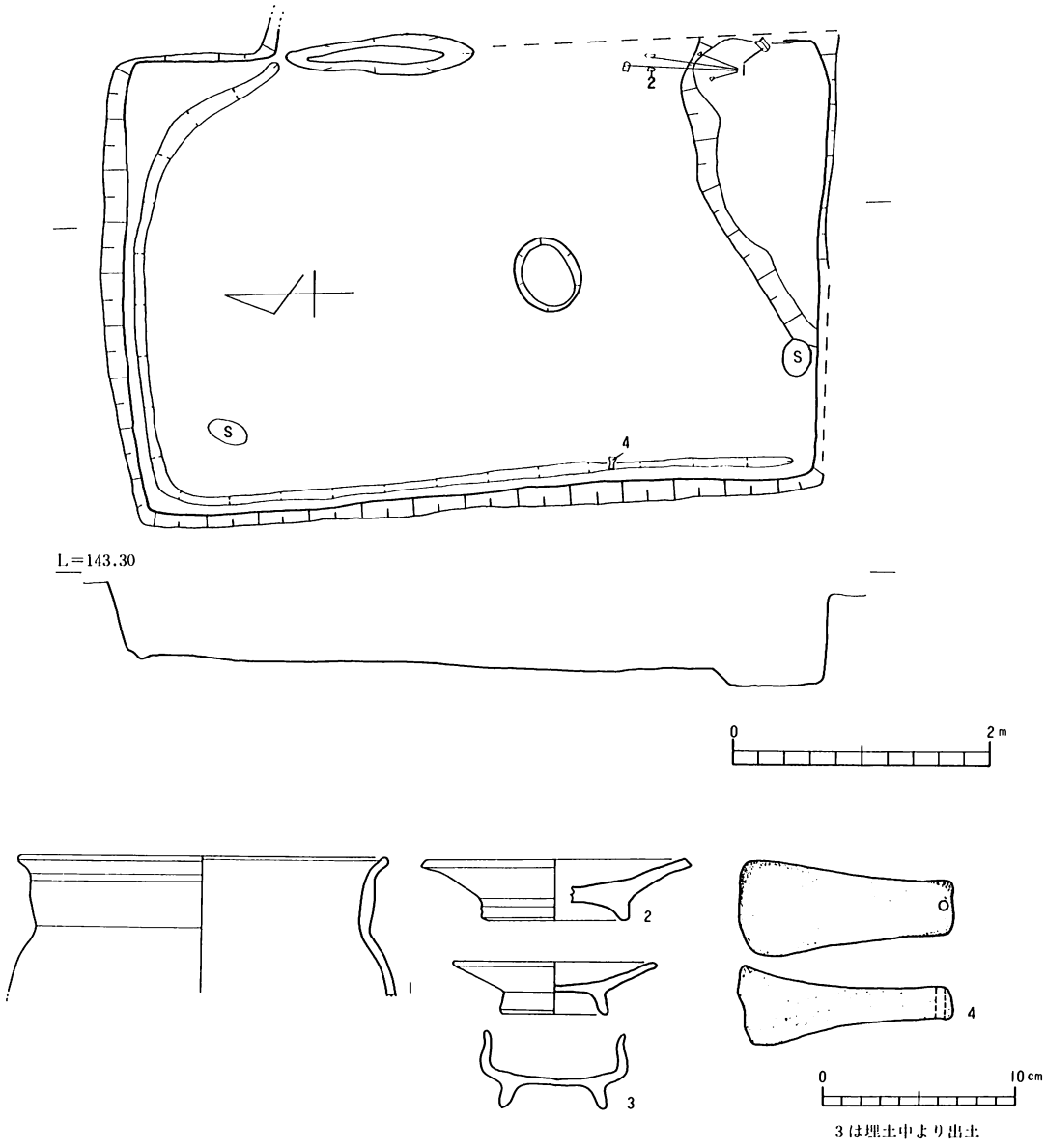
M区は、遺構の重複が激しく、最高９軒の重複を数えることができる。



第17図　溝６出土五輪塔

(a)　34号住居跡

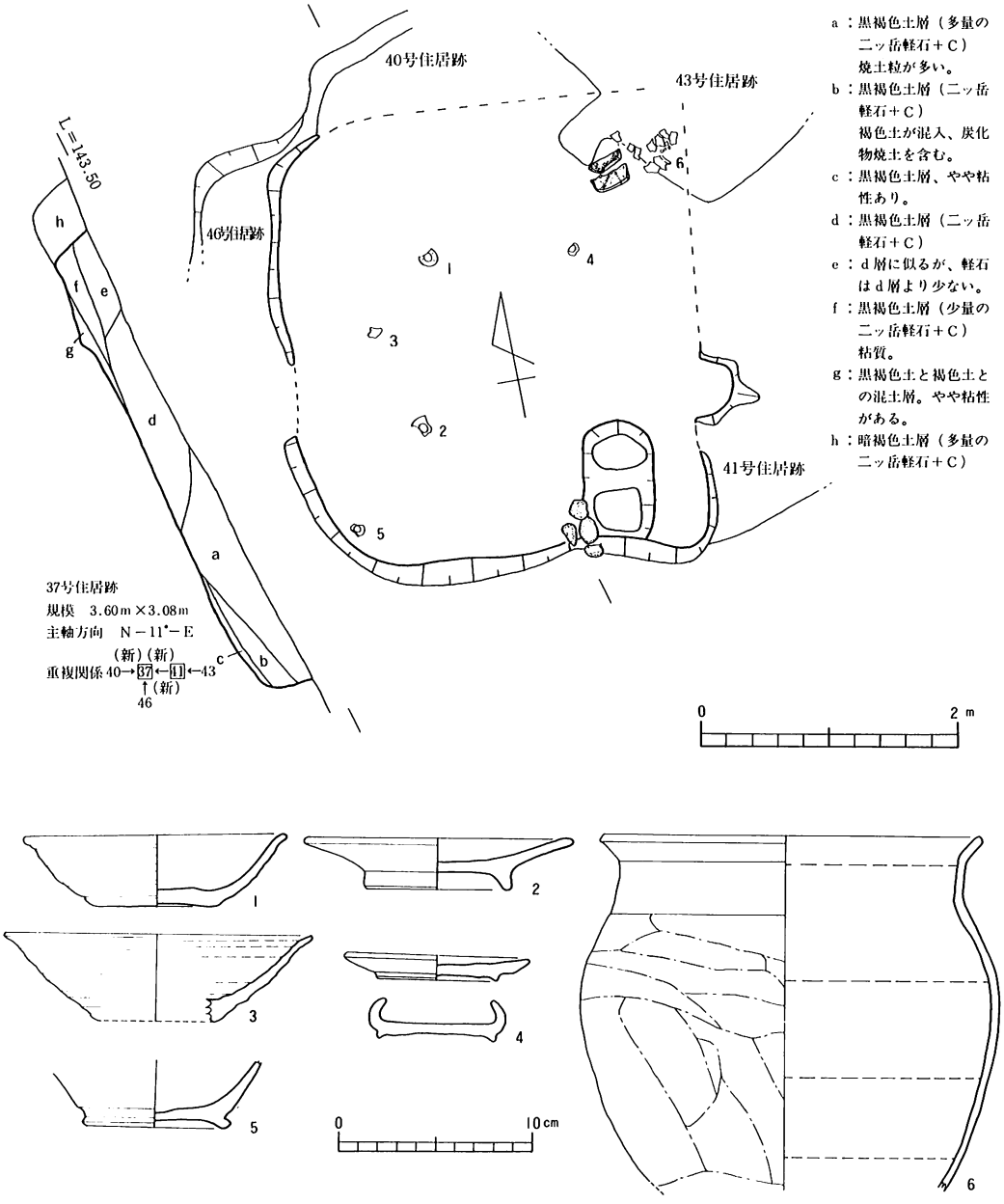
35号住居と重複し、これより旧い。堅緻な床面をもち、堀込が深く規模も大きくＬ区の住居とは様相を異にする。また周溝をもつ。出土遺物には４個体出土した砥石等がある。



第18図　34号住居跡及び出土遺物

(b)　37号住居跡

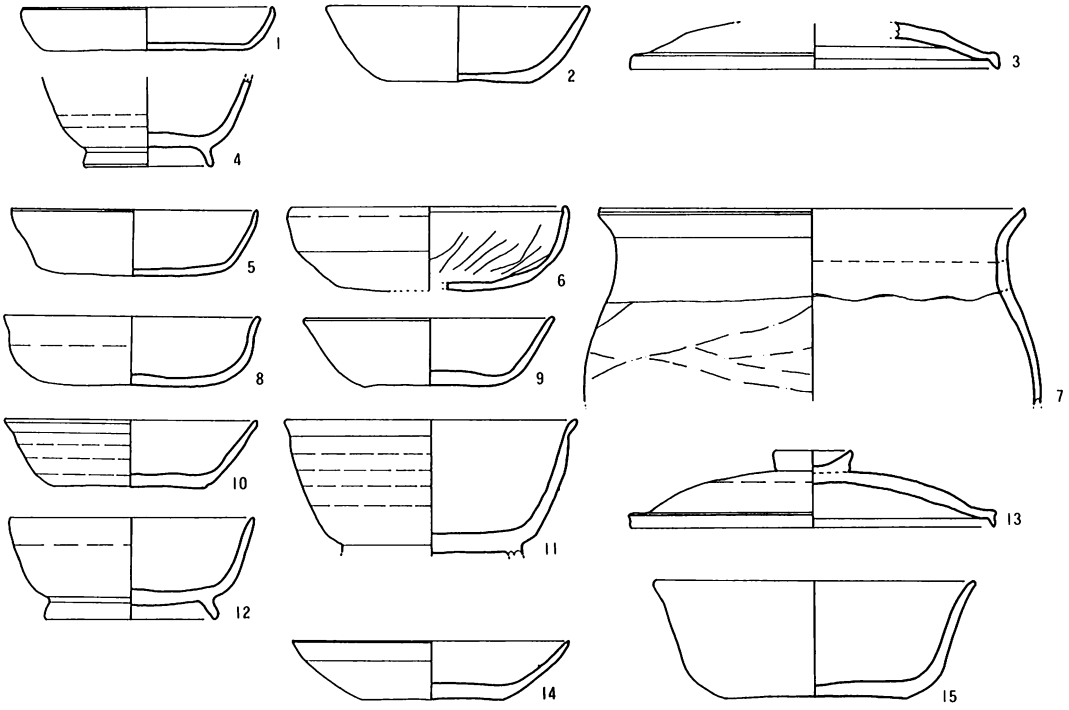
９軒重複した住居群の中のいちばん新しい住居跡である。東壁、北壁は不明。南壁際に凝灰岩の出土をみたが、カマドは、東壁南寄りに位置する。尚、出土遺物のうち、皿（第19図-２）と耳皿（第19図-４）は床面より浮いている。



第19図　37号住居跡及び出土遺物

(6)　4号住居跡及び7号住居跡出土遺物

B類（26ページ参照）の遺物を伴う住居の一括遺物実測図を次に掲載する。7号住居は遺構の過半が現道路敷下にあると推定される。4号住居は整理段階で二軒重複の可能性が考えられた。B類の他、D類の遺物も出土する。B類を4号-a、D類を4号-bとした。



7号住居出土遺物 1 ～ 4
4号住居出土遺物(a) 5 ～13
〃　　(b)14・15

0　10cm

第20図　参考図面　遺物類型B類遺物実測図7号住居・4号住居

第3表　遺 物 一 覧 表

○1号住居跡（第5図）

遺物番号	器　種	法量cm	技　法　等	胎　土	備　考
1 写真－1	土師器 ハガマ	口径26.0 残高21.0	口縁外面はロクロ使用のナデ、体部外面は縦方向調整。内面は↙方向のナデ口縁部に指圧痕あり	礫を含む	色調褐色。底部を欠く。焼成、良、カマド煙道に使用、二次焼痕あり
2	土師器 土釜	口径30.0 (復元) 残高11.0	口縁部内外面横ナデ。体部外面縦方向ヘラ削。内面横ナデ。	礫を含む	色調赤褐色 体部下半を欠く。
3 写真－2	平瓦	全長39.7		砂粒含有	色調灰白色。二次焼痕あり
4	カワラケ状土器	口径 8.1 (復元) 底径 6.0 (復元) 高さ 2.4	ロクロ水挽成形、底部回転糸切か	砂粒含有	色調淡褐色。焼成甘くもろい。

○11号住居跡（第8図）

1	土師器 坏	口径11.0 底径 4.0 高さ 3.3	ロクロ成形。底部回転糸切未調整	砂粒含有	焼成悪く、いぶしがかる。50％残
2	土師器 椀	口径11.2 底径 6.0 高さ 3.5	体部下半ヘラ削痕。ナデ調整。底部に粘土をひき上げたあとがある	砂粒含有	色調褐色。焼成良。口縁部一部欠。

遺物番号	器　種	法量cm	技　　法　　等	胎　土	備　　考
3 写真－3	須恵器 高台付椀	口径11.6 ～13.0 底径 6.2 高さ 4.5	ロクロ整形。器面に凹凸あり。底部回転糸切、高台貼付後周辺部ナデ調整。つくりが雑。楕円形	礫を含む粒子が荒い	灰黄色。焼成不良。90%残。内面×印の刻線
4 写真－4	須恵器 高台付椀	口径12.7 ～13.1 底径 3.3 高さ 4.1～6.0	ロクロ成形。底部回転糸切後、高台貼付け。つくりが雑。	砂粒含有粒子が荒い	灰黄色。焼成甘く、いぶしがかる。95%残
5	須恵器 高台付椀	口径20.2 (復元) 残高 8.2	ロクロ成形。器面にロクロ痕の凹凸が残る。	砂粒含有	色調灰色。二次焼痕あり。40%残
6	土師器 羽釜	口径19.8 (復元) 残高11.0	口縁部及び肩部の内外面、ロクロによるなで仕上げ。輪積み痕をのこし凹凸が認められる。	良	色調灰黒色。二次焼痕あり。体部下半を欠く。
7 写真－5	灰釉 輪花椀	口径21.3 残高 4.7	体部外面にロクロ痕の凹凸がのこる。釉は刷毛塗り。輪花は退化	緻密	色調灰白色。釉は淡緑色。焼成堅緻。底部欠。東濃か
8	灰釉 高台付椀	底径 7.5 残高 2.5	糸切後高台貼付け。その後回転利用のナデ調整。	緻密	色調、灰白色。底部のみ100%残。産地東濃か

○13号住居跡（第9図）

1 写真－6	土師器 甕	口径19.2 残高21.6	口縁部内外面横ナデ、指おさえの痕がある。肩部横方向の、体部下半は縦方向のヘラ削が顕著。	良	色調赤褐色。焼成良。底部欠
2 写真－7	須恵器 坏	口径12.3 底径 5.7 高さ 3.5～4.6	ロクロ成形。底部回転糸切未調整	礫を含む	色調灰褐色。焼成良 80%残
3	須恵器 坏	口径13.1 底径 5.8 高さ 4.1～3.8	ロクロ成形。器面にロクロ痕明瞭。底部回転糸切未調整。	礫を含む	色調灰褐色。焼成悪い 70%残

○16号住居跡（第10図）

1	土師器 坏	口径10.7 底径 5.9 高さ 3.8	口縁部及び内面ナデ調整。体部指おさえの痕が残る。底部内面指おさえの凹がある。外面・底部雑なヘラ調整。	礫を含む (多い)	色調暗赤褐色。焼成良。口縁部一部欠。
2 写真－9	土師器 坏	口径12.1 底径 6.0 高さ 4.2	ロクロ成形。外面にロクロ痕の凹凸が残る。底部回転糸切未調整。	礫を含む (少量)	色調赤褐色。焼成良。完形
3 写真－8	須恵器 高台付皿	口径13.0 底径 6.1 高さ 3.7	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け。底部内面に凸。高台つくり雑。	砂粒含有	色調灰色。焼成やや甘く、いぶしがかる。
4	須恵器 高台付椀	口径14.4 底径 8.6 高さ 5.4	ロクロ成形。体部外面にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。内面底部に波状の凹凸がある。回転糸切後高台貼付け。雑なつくりで、全体がゆがんでいる。	礫・砂粒を含む (多い)	色調灰褐色。焼成悪い。60%残
5	須恵器 椀	口径11.2 (復元) 底径 4.0 高さ 3.2	ロクロ成形。外面は、口縁部を除き、手持ヘラ削調整。ていねいなつくり。	良	色調灰白色。焼成良。40%残。
6	須恵器 高台付椀	底径 7.4 残高 4.6	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け。	砂粒含有	色調灰色。焼成良。二次焼痕あり。底部のみ60%残
7	須恵器 高台付椀	底径 7.0 残高 3.7	ロクロ成形。底部内面に凸。回転糸切後高台貼付。高台の付け方は雑である。	良	色調淡褐色。焼成甘い。底部のみ100%残

遺物番号	器　種	法量cm	技　法　等	胎　土	備　考
8	土師器 羽釜	口径18.1 (復元) 残高 7.0	口縁部横ナデ。指おさえの痕が残る。輪積痕あり。	礫を含む	二次焼痕あり。口縁部のみ40%残
9	灰釉 高台付椀	口径16.2 (復元) 底径 7.5 高さ 4.6	底部ヘラ調整後高台貼付け。釉は刷毛塗り。	良 砂粒少量含有	色調灰褐色。釉は淡緑色。40%残
10	須恵器 椀	口径11.7 (復元) 底径 4.5 高さ 4.2	ロクロ成形。底部回転糸切未調整。内面底部に凹。	良 礫を含む	色調黒灰色、一部灰色。焼成甘く、内外面ともいぶしがかる。40%残。埋土中より。

○23号住居跡（第12図）

1 写真－11	須恵器 羽釜	口径24.8 (復元) 残高23.0	口縁部ロクロ整形。肩部輪積み痕があり、指おさえの痕が顕著である。体部下半、縦方向のヘラ削。	石英粒が目立つ	色調灰白色。焼成やや悪い。底部欠。
2	土師器 羽釜	残高 5.7	輪積み痕がある。	砂粒含有	色調暗褐色。二次焼痕あり。
3 写真－12	須恵器 高台付椀	口径12.1 底径 6.0 高さ 4.8～5.0	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け。つくりが雑である。	礫を含む	色調淡褐色。焼成やや甘い。口縁部一部欠。

○33号住居跡（第14図）

1	土師器 坏	口径15.6 底径 9.0 高さ 4.4～4.8	口縁部横ナデ。体部外面横方向の、底部不定方向のヘラ削。内面体部放射状の、底部ラセン状のヘラみがき痕がある。	良	色調赤褐色。焼成良。口縁部一部欠。
2	土師器 坏	口径12.6 底径 8.9 高さ 3.5	口縁部横ナデ。体部外面横方向、底部不定方向のヘラ削。内面体部放射状の、底部ラセン状のヘラみがき痕がある。	良	色調赤褐色。焼成良。口縁部一部欠。
3 写真－25	須恵器 蓋	口径17.2 高さ 1.8	ロクロ成形。内面に波状の凹凸がある。外面一面に自然釉がかかる。	良	色調灰色。焼成良。完形
第 13 図 写真－24	鉄 刀　子	残長10.9	柄の一部に木部が残る		

○27号住居跡（第14図）

4 写真－14	須恵器 高台付椀	口径13.8 底径 5.0 高さ 7.1	ロクロ整形。器面に縞状の凹凸が残る。底部回転糸切後高台貼付け。全体的にゆがんでいる。	礫を含む	色調褐色。酸化炎焼成。口縁部一部欠。
5	須恵器 高台付椀	口径12.5 底径 6.0 高さ 4.7	ロクロ整形。体部外面に凹凸が残る。底部回転糸切後高台貼付け。	砂粒含有	色調淡黄褐色。酸化炎焼成。60%残
6 写真－16	須恵器 高台付椀	口径13.4 底径 6.2 高さ 4.2	ロクロ成形。内面底部に凸。回転糸切後高台貼付け。つくりややていねい。	砂粒含有	色調灰白色。焼成やや甘い。90%残
7	須恵器 高台付椀	口径13.0 底径 6.5 高さ 5.1	ロクロ成形。糸切後高台貼付け。底部内面に波状の凹凸がある。底部と体部の境に指圧痕がある。	砂粒含有 粒子が荒い	色調灰色。焼成やや悪い。
8	須恵器 高台付椀	口径13.8 底径 6.2 高さ 5.3	ロクロ成形。内面底部に凹。高台貼付け後、高台うらヘラ調整。口縁部にゆがみあり。	砂粒含有	色調黄褐色。酸化炎焼成。50%残
9	須恵器 高台付椀	底径 6.5 残高 3.6	ロクロ成形。器面に波状の凹凸あり。内面底部に凹。底部回転糸切後、高台貼付け。内面ヘラ書らしきものあり、判読不能	礫を含む	色調灰黒色。内外面ともいぶしがかる。
10	須恵器 高台付椀	底径 6.6 残高 7.2	ロクロ成形。内面底部に波状の凹凸。回転糸切後高台貼付け。	礫を含む	色調灰褐色。焼成やや甘い。底部のみ50%残

遺物番号	器種	法量cm	技法等	胎土	備考
11 写真－15	灰釉 高台付皿	口径13.5 底径 7.0 高さ 3.0	釉は刷毛塗り。	良	色調灰色。釉は淡緑色。50％残
12 写真－17	土師器 坏	口径11.2 底径 4.7 高さ 3.1～3.8	ロクロ成形。底部回転糸切未調整。底部内面に凸。	砂粒含有	色調淡褐色。焼成良。完形
13	土師器 坏	口径11.1 底径 5.7 高さ 4.3	ロクロ成形。底部回転糸切未調整。	良	色調淡褐色。焼成やや悪い。80％残
14	土師器 坏	口径 9.8 （復元） 底径 2.9 （復元） 高さ 3.9	ロクロ成形。回転糸切未調整。口縁部スス付着。	良	色調淡褐色。焼成良。40％残
15	土師器 小型甕	口径10.9 （復元） 最大径 13.4 残高10.5	体部上半ロクロ整形、下半縦方向主体のヘラ削。内面ナデ調整。口縁部ヘラみがき。	良	色調淡褐色。焼成良。底部欠。40％残
16 写真－13	土師器 羽釜	口径17.3 底径 6.0	ロクロ整形。しっかりしたつくり。輪積み痕あり。つば断面戴頭三角形	礫を含む	色調暗褐色。二次焼痕あり。口縁部のみ60％残
17	須恵器 羽釜	残高 7.8	ロクロ整形。つばの内側に指おさえの痕がある。	砂粒含有	色調灰色。焼成良

○29号住居跡（第16図）

1 写真－19	土師器 坏	口径14.7 底径 7.5 高さ 3.6	口縁及び内面ナデ調整。体部外面周にそってのヘラ削。	砂粒含有	色調暗赤褐色。焼成良。完形
2	土師器 坏	口径12.3 （復元） 底径 7.8 高さ 3.0	口縁部及び内面ナデ調整、不明瞭ながら放射状のヘラみがき痕がみられる。外面、体部底部ヘラ削。	礫を含む	色調赤褐色。焼成良。50％残
3	土師器 盤	口径18.7 底径11.2 高さ 7.5	口縁部内外面横ナデ。体部外面横方向の、底部不定方向のヘラ削。内面体部に、不明瞭ながら放射状のヘラみがき痕がみられる。	砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。口縁部一部欠。
4	土師器 坏	口径12.4 底径11.0 高さ 3.2	口縁部及び内面ナデ調整。底部不定方向のヘラ削。底部内面に凹。	砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。口縁部に二次焼痕あり。口縁部一部欠。
5	須恵器 蓋	口径12.9 高さ 2.5	ロクロ成形。外面回転ヘラ削調整。	礫を含む	色調青灰色。焼成良。口縁部一部欠。
6 写真－21	須恵器 蓋	口径13.0 高さ 2.0	ロクロ成形。外面回転ヘラ削調整、一面に黄白色の釉がかかる。	良	色調青灰色。焼成良。完形
7	須恵器 蓋	口径15.8 高さ 2.6	ロクロ成形。内面ナデ、外面回転ヘラ削調整。	礫を含む	色調青灰色。焼成堅緻。口縁部一部欠。
第15図 写真－20	鉄製 カマ （か？）	残長 7.3 巾 2.9			

○30号住居跡（第16図）

8 写真－23	須恵器 高台付椀	口径14.6 底径 7.2 高さ 5.0	ロクロ成形。器面にロクロ痕の凹凸がある。底部回転糸切後高台貼付け。	良	色調灰白色。焼成やや悪い。60％残
9	土師器 脚付甕	口径12.6 （復元） 脚部底径 8.9 高さ15.3	口縁部横ナデ。体部外面斜方向↘から縦方向↓のヘラ削。内面ナデ調整。脚部ナデ調整。指おさえの痕が残る。	良	色調赤褐色。焼成良。二次焼痕あり、口縁部から肩部にかけてスス付着。50％残

遺物番号	器　種	法量cm	技　法　等	胎　土	備　考
10 写真－22	土師器 甕	口径19.8 残高23.0	口縁部横ナデ。肩部横方向の、体部縦方向のヘラ削。内面に輪積痕の凹凸が残る。ナデ調整。口縁部には指おさえの痕が残る。	良	色調赤褐色。焼成良。二次焼痕あり。底部を欠く。

○34号住居跡（第18図）

1	土師器 甕	(復元) 口径19.1 残高 7.1	口縁部横ナデ。肩部斜方向のヘラ削。	良 砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。
2 写真－27	須恵器 高台皿	(復元) 口径14.0 底径 7.7 高さ 3.2	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け。口唇部ヘラ状のもので切落す。	良	色調灰白色。焼成良。40％残
3 写真－28	耳皿	(復元) 口径10.6 底径 5.6 高さ 2.8	ロクロ成形。高台貼付後ナデ調整。しっかりした高台をもつ。つくりはていねい。	良 長石、雲母を含む	色調灰褐色。酸化炎焼成で内面いぶし焼。50％残
4 写真－26	砥石	長さ11.1 高さ 4.2	3面に使用痕あり。端部に穴。		

○37号住居跡（第19図）

1 写真－29	須恵器 坏	口径13.5 底径 6.5 高さ 3.8	ロクロ成形。底部回転糸切未調整。外面にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。	良	色調灰色、一部灰青色。90％残
2	須恵器 皿	(復元) 口径13.9 底径 7.8 高さ 2.7	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け。	礫を含む	色調青灰色。焼成良。50％残
3	土師器 高台椀	(復元) 口径15.8 底径 6.9 残高 4.2	ロクロ成形。器面にロクロ痕の凹凸が明瞭に残る。回転糸切後高台貼付け。	良	色調赤灰色。焼成良。一部いぶしがかる。50％残
4 写真－31	須恵器 耳皿	口径 9.6 底径 6.3 高さ 1.2	ロクロ成形。底部回転糸切後高台貼付け、その後周辺部ナデ調整。	良 砂粒少量含む	色調灰色、一部灰青色。90％残
5	須恵器 高台椀	底径 7.7 残高 2.9	ロクロ成形。内面底部に凹。底部回転糸切後高台貼付け、その後周辺部ナデ調整。	砂粒含有	色調灰色。焼成やや悪い。口縁部欠く。
6 写真－30	土師器 甕	口径20.5 残高18.3	口縁部内外面横ナデ。体部内面に輪積み痕、口縁部に指おさえの痕がある。外面肩部横方向→の、体部斜↘方向のヘラ削。	砂粒含有 良	色調淡赤褐色。焼成良。体部下半を欠く。

○(参)7号住居跡（第20図）

1	土師器 坏	(復元) 口径12.5 底径10.3 高さ 2.2	口縁部及び内面横ナデ。底部不定方向のヘラ削。	良 砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。50％残
2	須恵器 坏	口径13.1 底径 7.2 高さ 3.8	ロクロ成形。底部回転糸切後、周辺部ヘラ調整。	礫を含む	色調白灰色。焼成良。口縁部一部欠。
3	須恵器 蓋	口径18.3 (復元) 残高 2.3	ロクロ成形。内外面とも口縁部に黄白色の自然釉がかかる。	砂粒含有	色調灰色。焼成良。
4	須恵器 高台付椀	底径 6.4 残高 4.3	ロクロ成形。器面に波状のロクロ痕が残る。底部高台貼付け後ヘラ調整。ていねいなつくり。	砂粒含有	色調白灰色。焼成良。口縁部欠。

○(参)4号住居跡（第20図）

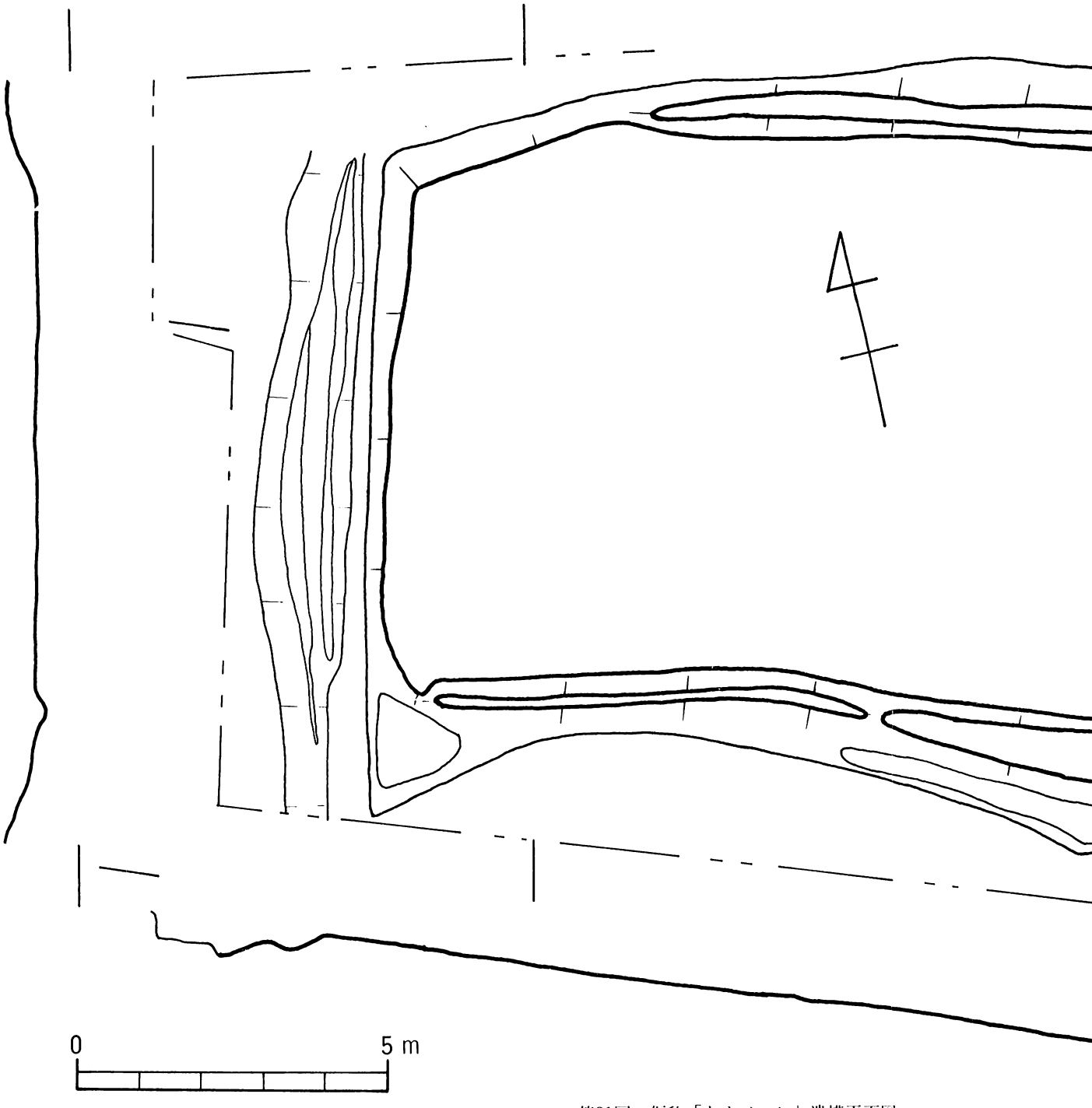
遺物番号	器　種	法量cm	技　　法　　等	胎　土	備　　考
5	土師器 坏	口径12.3 底径 9.9 高さ 3.4	口縁部及び内面ナデ調整。外面体部横方向の、底部不定方向のヘラ削。体部に指おさえの痕がある。	良	色調淡褐色。焼成良。40%残
6	土師器 坏	(復元) 口径13.7 (復元) 底径 9.1 高さ 4.3	口縁部および内面ナデ調整。体部、底部外面ヘラ削。内面に指おさえの痕がある。	砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。40%残
7	土師器 甕	(復元) 口径21.3 残高 9.8	口縁部及び内面ナデ調整。肩部横方向のヘラ削。	良	色調赤褐色。焼成良。体部を欠く。
8	土師器 坏	口径11.0 底径 6.5 高さ 3.5	口縁部及び内面横ナデ。体部及び底部外面ヘラ削。口縁部に指おさえの痕が残る。	砂粒含有	色調暗赤褐色。焼成良。50%残
9	須恵器 坏	口径12.5 底径 6.5 高さ 3.5	ロクロ成形。回転糸切後周辺部ヘラ調整。	良	色調灰色。焼成良。80%残
10	須恵器 坏	口径12.6 底径 7.7 高さ 3.4	ロクロ成形。回転糸切未調整。底部内面に波状の凹凸がある。外面にロクロ痕が残る。	良	色調灰青色。焼成良。60%残
11	須恵器 高台付椀	(復元) 口径14.7 底径 8.2 高さ 6.8	ロクロ成形。底部切りはなし後回転ヘラ削調整。	礫を含む (少量)	内面淡褐色、外面灰色。焼成やや甘い。40%残、高台を欠く。
12	須恵器 高台付椀	(復元) 口径12.3 底径 8.5 高さ 5.1	ロクロ成形。底部、回転ヘラ削調整後高台貼付け。	砂粒含有	色調灰色。焼成やや甘い。40%残
13	須恵器 蓋	口径18.1 高さ 3.9	ロクロ成形。外面回転ヘラ削調整。つくりが良い。	礫を含む (少量) 良	色調灰色。焼成良。完形
14	土師器 皿	(復元) 口径13.8 底径 7.2 高さ 3.0	ロクロ成形。回転糸切未調整。	緻密	色調赤褐色。焼成良。60%残
15	土師器 椀	(復元) 口径16.0 底径 9.5 高さ 5.8	ロクロ成形。器面にロクロ痕の凹凸が残る。底部回転糸切後調整。	良 砂粒含有	色調赤褐色。焼成良。50%残

(7)　いわゆるトウノコシについて

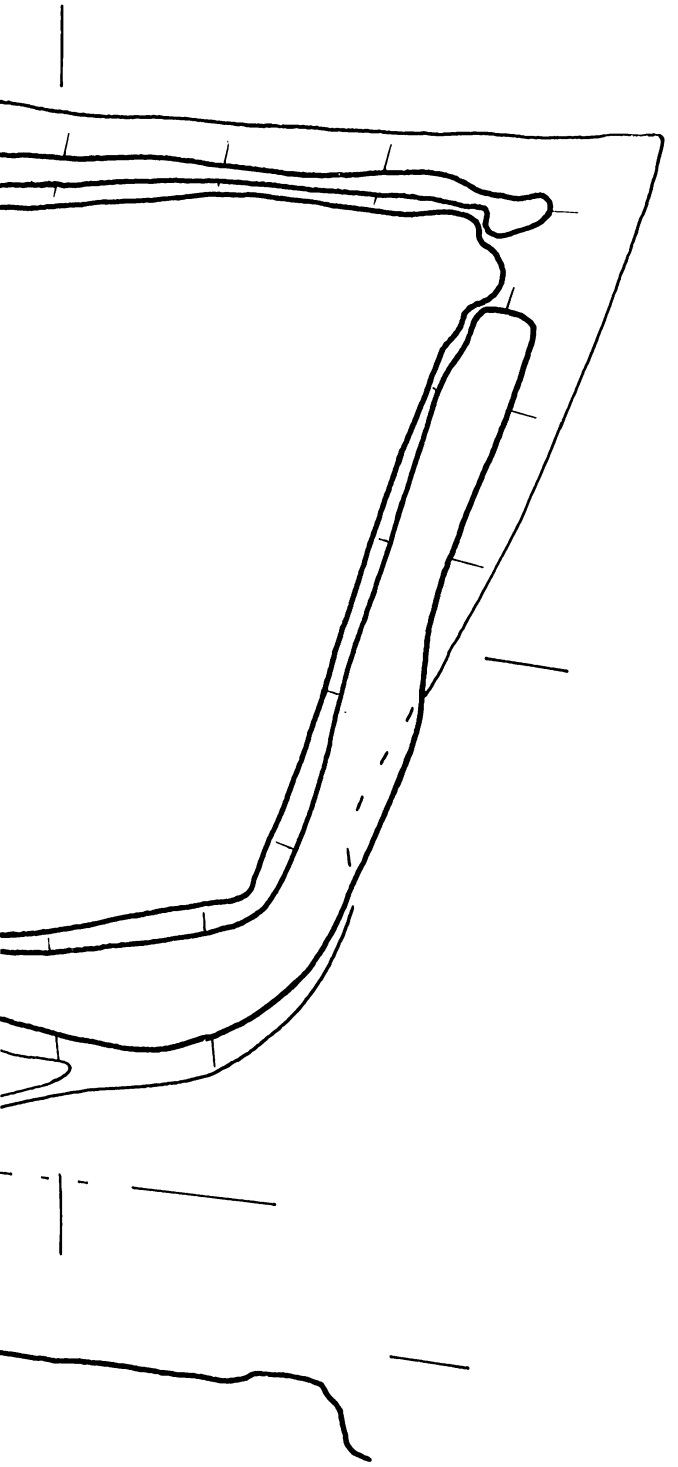
a　伝　　承

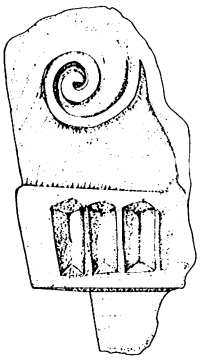
前橋市総社町高井字池田に「トウノコシ」と通称される50坪程の荒地があった。トウノコシは、比高3m程の谷にあり、周囲を水田に囲まれ、そのすぐ北側では最近まで清水が湧いていた。トウノコシは、一種の禁忌地とされ、耕作はおろか人々の立入さえ憚かられる土地であった。

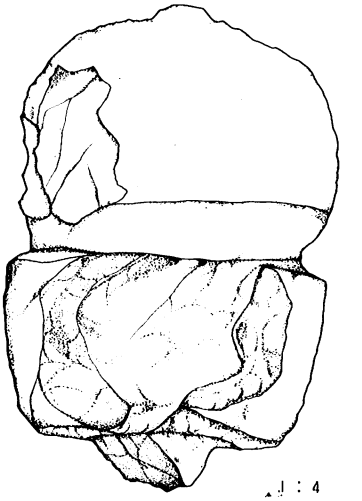
そこは、総社町の光厳寺境内に現存する「伝東覚寺層塔」(市指定重文)の故地とされており、トウノコシ(塔残し、塔の腰)なる地名の由緒となっている。またこの付近には、寺沢、せうもっこ河原(書物庫河原)、トウカキ、寺橋等の地名・橋名がある。これらのことから、トウノコシには中世に栄えたとされている「東覚寺」と関連する何らかの遺構の存在が推定された。[注1] 東覚寺なる寺院は、文献にはあらわれず、その実態は定かではないが、ただ暦応元年（北朝年号1338年）には既に存在しており、その廃絶は戦国時代のことと思われる。これは、長野



第21図　仮称「トウノコシ」遺構平面図






1 : 4

県南佐久郡臼田町田口の上宮寺（同町新海神社神宮寺）梵鐘の銘文に明らかである。「南閻浮提　大日国　上野国　群馬郡　高井郷　東覚寺推鐘　暦応元年戊寅十二月廿一日　大工浄円当時衆徒等　勧進沙門良義　本願主昌助藤原亀と㊀丸　（以下追刻）信州佐久郡田口神宮寺旦郡田口左近将監長能　奉寄進新海大明神御宝前　天文十二年癸卯十一月十二日」この梵鐘は、武田氏の上州攻略の際、武田方の軍勢に持ち去られたとの伝承[注2]がある。

さて、光巌寺境内の伝東覚寺層塔は、相輪、七層、塔身、二重基台からなり、総高4.17mの堂々とした層塔で宝町時代の作と推定されている。これがトウノコシより光巌寺に寄進されたのは幕末のことと言われ、明治十年には光巌寺に存在していた。また、光巌寺墓地内には、明応四年（1495）銘の輪廻塔があり、やはり東覚寺跡より移されたものと言われている。

これらより、高井の地（現在の総社町高井及び青梨子町の一部を含む）には東覚寺なる寺院が中世に栄えており、現在のトウノコシ近辺がその故地として推定されたのである。

b　遺　　構

トウノコシは第２図のように谷の南側に位置し、南及び西側は40～50㎝、東及び北側は約１m高く、台状の不等辺四角形をなす。現状では雑木が繁り、水田と桑畑に囲まれていた。西側面は水田によって多少削られている様子がうかがえた。樹木伐採後は、偏平な地表面に人頭大の大量の石が散布していた。主に、周囲との比高差の少い地点に集中しており、周辺からトウノコシ内に廃棄されたものと思われる。また、地表面では、礎石、塔の基礎等は認められなかった。

30㎝程の覆土を除去すると、黄褐色の固い地山（Ⅷ・Ⅸ層）が出る。ここでは、地山を削平し、西を除く三面を畔状に掘り残した遺構が検出された。（これを「トウノコシ遺構」と仮称する、折込参照）畔状部分は、東・南・北の周縁部をめぐり、西側ではほとんど高まりを見ない。東側の畔状部分は、約90㎝の巾で高さ20㎝としっかりしているが、南と北では巾20～40㎝と狭くなり、高さも低くなる。畔状部分に囲まれた平坦部分は、南北8.9～9.3m東西14.9～17mの台形で、北東に向ってやや高くなるもののほぼ水平な面である。西辺と南辺及び北辺はほぼ直角で、東辺は南辺に対し約20°外に開く。ここでは、遺物の出土もなく、礎石・礎石跡・柱穴・版築等の造作は認められなかった。なおトウノコシ遺構西側の溝三条および井戸状のピットは後世のもので、トウノコシ遺構とは直接の関係はないものと思われる。

C　遺　　物

遺物は、トウノコシ遺構覆土中には認められず、大半は表面に散布する大量の石とともに見出された。前述の通り、トウノコシ遺構に直接つく遺物はないが、東覚寺の一部と推定されるトウノコシ周辺の状況をうかがうことができよう。

仏教関係の遺物では、五輪塔空風輪、宝篋印塔笠部の破片、板碑片がある。生活遺物としては、石臼片三片、中世以後の陶磁器片がある。他に瓦片二片があるが、一片は布目瓦、一片は近世以後のものである。五輪塔空風輪は、南北期末期から室町時代初期のものと推定され、石材は角閃石安山岩、最大高24.6㎝最大巾16.5㎝を計る。宝篋印塔は、笠部の破片で室町時代中期のものと推定され、石材は角閃石安山岩である。板碑片は、緑泥片岩と絹雲母片

岩の二種があり、いずれも銘文・刻線等は認められない。陶磁器片は、いわゆる軟質陶器から、志野・現代陶まで他の遺物と共に廃棄された形で出土したが、多くは無施釉の焼締陶器である。しかし、全て小破片で器形等の判別は不可能であった。石臼は、三片ありいずれも径が20cm内外で茶臼と思われる。他に、人頭大の自然石の一部を径7cm深さ3cmほど摺鉢状に凹ませた石が一個発見された。

d　小　　結

トウノコシでは、基檀、礎石等の寺院建造物の痕跡は認められず、伝東覚寺層塔の旧所在位置も確定できなかった。しかし、トウノコシが立地上周辺から孤立した地形を成し、「トウノコシ遺構」と仮称した遺構が存在し、仏教的、中世的な遺物が表面採集ながらも見出されること、伝東覚寺層塔の伝承等からして、トウノコシの周辺に東覚寺が存在していたことは十分予想されることである。また、トウノコシが何らかの特別な土地であったろうことも十分予想できよう。ただし「トウノコシ遺構」の性格が不明であり、そこが東覚寺跡の一部とは速断しかねる。

ところで、東覚寺の廃絶は従来戦国時代に武田氏の上州攻略の際に廃絶したとされている。トウノコシには、火災の痕跡はなく、前述の梵鐘銘には、「天文十二年に田口長能が神宮寺に寄進」の旨記されているが、天文十二年（1543）以前に武田氏が上野国を侵攻した様子はなく、田口長能なる武士も、武田信玄に反抗し田口城で討死[注3]（天文十七年）しており、武田氏による東覚寺廃絶の伝承は信じ難い。いずれにしても、中世高井の地には東覚寺という寺院が存在し、天文十二年以前には廃絶していたが、その跡は、推定地（トウノコシ）付近の発掘調査[注4]にもかかわらず確定できなかった。

III　ま　　と　　め

1　遺　　構

(1)　溝

Ｉ区、Ｊ区における溝及び溝６（Ｌ区）の性格は不明である。北から南流する溝４（Ｌ区）と溝６（Ｍ区）は、Ｍ区の南の谷（水田）へ向うと推定される。現在、東西堀と呼ばれる用水が、２条の溝のすぐ東を並行する点、昨年度調査で検出され、灌漑用水と推定された溝と形状が似る点等より、この２条は時代こそ違え、灌漑用水ではないかと思われる。

(2)　竪穴住居

奈良時代に属する住居は、長軸を東西方向にもつ。一方平安時代に属すると思われる住居は、26号住居を除き全て南北方向に長軸をもつ。長軸の方位をもとに類型化とすると右表のようになる。なお、方位は磁北を基準とし、北は真北より6°40′東へ偏している。

表のように３類（ほぼ真北から2°～３°のズレ）４類（真北から３°～10°東偏する）に平安時代の住居が集中しており、傾向として、４類の方が時代が古そうである。また、Ｌ区の３類及び４類の住居の配置を見ると、それぞれ西に開く半円上に配列され、中央部分は空白である。また、

第4表　方位別住居一覧表

類	長　軸　方　向	住　　居　　番　　号
1	東　　西	26号、29号、33号、41号、43号、44号
2	N-7°-Eより東偏	1号、2号、3号、4号、9号、37号
3	N-5°-W～N-3°-W	5号、16号、20号、22号、23号、25号、27号、34号、36号
4	N-5°-W～N-9°-W	10号、11号、12号、13号、18号、21号、30号、31号、39号
5	N-10°-W～N-13°-W	6号、14号、15号、19号
6	N-16°-W～N-17°-W	7号、38号

それぞれの半円は多少のズレはあるもののほぼ重なる。すべての住居の長軸と短軸の比の値を算出したが、比の値にバラつきが大きく、パターン化できなかった。カマド位置は、一つの例外（16号住居南壁）を除き東壁につき、時代が下るにつれて東壁南端に移行する傾向があり、同時に貯蔵穴も消滅するようである。カマドの構造は、地山から切り出したと思われる未固結の凝灰岩（Ⅸ層）を焚口部分に使用したものが14軒認められた。また、最も新しい時代に属すると思われる住居では凝灰岩の使用は認められず、山石が使用されていた。

(3)　トウノコシ

トウノコシと東覚寺との関連をつかみ得なかったのは残念であった。トウノコシ周辺の今後の調査に期待したい。また、東覚寺に関する文献が知られていない以上、東覚寺に関する伝承を詳細に検討する必要があろう。

2　遺　　物

本調査では、竪穴住居が遺構遺物の大半を占めており、遺物も奈良、平安時代のものに集中している。縄文時代、中世、近世の遺物は若干見られるが、弥生時代及び鬼高期以前の遺物は全く見られない。ここでは、竪穴住居出土の遺物について若干の考察を加えながらまとめることにする。

(1)　遺物の類型化[注5]（第5表参照）

器制の変化に留意して本概報にあげた住居の遺物を類型化すると下表のようになる。

A類　糸切未調整の全く出土しないグループを一括した。土師器は、カメ、坏、須恵器は坏（ヘラ切り）、高台坏（ヘラ切り）、蓋がある。坏は全て手持ヘラ削りで体部に段を有するものもあり、口縁部は、内彎する。また内面に暗文をもつものもある。蓋は概ね天井が浅く、端部にカエリを有するものが多い。ツマミは、リング状（14図－3）又は宝珠型の退化したツマミ中央のやや凸出したもの（16図－5、6、7）である。

B類　コの字状口縁を有するカメと、糸切後周縁部調整及び糸切未調整の須恵坏が出現する。須恵坏は体部が直線的に開きつくりが丁寧である。高台椀高台坏はヘラ切の技法が残る。蓋はカエリが消滅し、ツマミ部分は中央がへこむ。灰釉陶器羽釜はない。

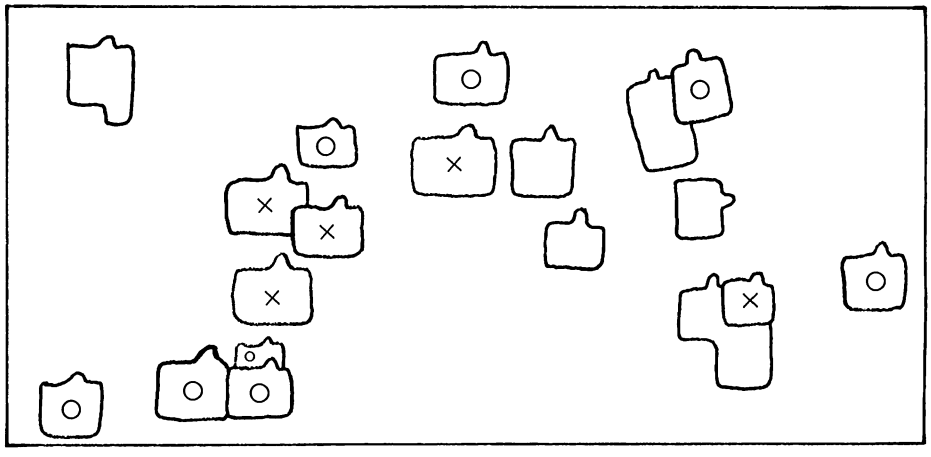
C類　コの字状口縁を有するカメの外にやはりコの字状口縁をもつ小型カメ（脚付を含む16図－9）が出現する。ヘラ切の技法が消え、須恵坏は全て糸切未調整で、口縁がやや外反し、

第5表　器　制　一　覧

時期	類型	類似関係	住居番号	土師 コの字カメ	土師 小型カメ	土師 羽釜	土師 土釜	土師 糸切坏	土師 その他	須恵 羽釜	須恵 高台坏	須恵 高台碗	須恵 蓋	須恵 高台皿	須恵 耳皿	灰釉 碗	灰釉 皿	瓦	備考	他の遺構
真間	A		29					$○^{2}$	盤				$○^{3}$						29号フタカエリつき	9号、38号、41号 43号、44号、45号
			33					$○^{2}$					$○^{1}$							
国分	B		7					$○^{1}$			$○^{1}$	$○^{1}$	$○^{1}$						フタカエリ消滅	
			4(a)	$○^{1}$				$○^{3}$			$○^{2}$	$○^{1}$ (ヘラ切)	$○^{1}$	$○^{1}$						
	C		13	$○^{1}$							$○^{2}$									3号、5号、6号 10号、12号、14号 18号、19号、26号 28号、31号、36号 38号、39号
			37	$○^{1}$							$○^{1}$		$○^{2}$		$○^{1}$	△				
			34	$○^{1}$									○		$○^{1}$	△				
			30	$○^{1}$	$○^{1}$	△							$○^{2}$							
	D		11		$○^{1}$	$○^{1}$			$○^{1}$		$○^{2}$	$○^{3}$	$○^{4}$			$○^{3}$			27号高台碗酸化炎、焼成、3個体	15号、21号、22号 24号、25号
			16			$○^{1}$		$○^{1}$	$○^{1}$			$○^{2}$	$○^{3}$		$○^{1}$	$○^{1}$				
		○	27		△	$○^{1}$			$○^{3}$		△		$○^{7}$				$○^{1}$			
		○	23			△					$○^{2}$		$○^{1}$			○	$○^{2}$			
	E	○	1			$○^{2}$	$○^{1}$											○	2号よりカワラケ状土器出土	2号

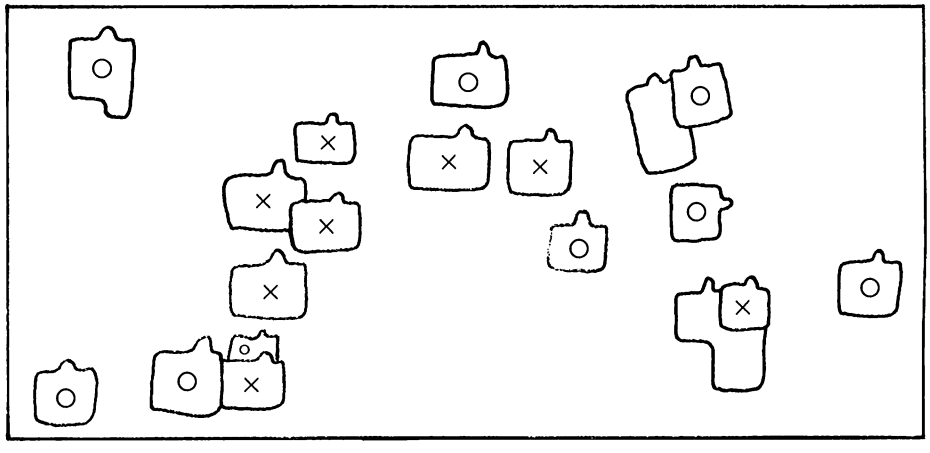
（○は住居につくもの、△は多少疑問のあるもの。数字は個体数）

○：3類
（真北に近い）
×：4類
3°～10°東偏
無印：その他



第22図　L区概念図　（上：主軸方位による類型　下：遺物による類型）

○：C類
×：D類
無印：A類



ロクロ痕を明瞭に残す。また、高台皿が出現し、高台椀が多くなる。高台椀は、B類より焼成、つくりともに雑になるがD類ほどではない。器厚は薄く、体部は内彎しつつ外反する。高台は底部外端部に低くつき、高台脇はよくナデつけられ、接地点は高台内側である。羽釜と灰釉陶器はともに一部の住居から出土するが、いずれも小破片である。

D類　羽釜と灰釉陶器が出現する。遺物のバリエーションが豊富である。羽釜は、口縁部が内傾するものと直に立つものがあり、ツバは概ね断面三角形である。羽釜の多くは、器厚が厚く、つくりも丁寧であるが、器厚が薄く、焼成つくりとも粗雑なもの（12－1図1）もある。須恵器の椀坏類は、いずれもつくり焼成が悪く、中には、いぶしがかかり内外面ともに黒色のもの（10図－10、14図－4）もある。特に高台椀にその傾向が著しく粗製乱造を思わせ、中には酸化炎焼成のもの（14図－4、5、8）もある。焼成時の歪みが大きく器厚はC類に比べ厚く、口唇部の外反するものが多い。高台は粗雑傾向が著しく安定性を欠く。高台皿の高台も同様である。土師器坏は体部が直線的に開き、須恵器を模したものもある。（11図－2）。ここで特徴的なのは、27号住居出土の土師坏である。（14図－12、13、14）この三点に類する器形は、27号住居以外では全く見られない。

E類　土釜（6図－2）とカワラケ状土器（6図－4）が出現する。羽釜は口縁部が短く内傾しツバは断面載頭三角形である。また、この類に属する住居からは、瓦の出土がある。

以上、器制をもとにして遺物の類型化を試みた。A類は糸切未調整出現以前として把握した。一方国分期に相当すると思われるB類以下は、煮沸用具の変化によって大きく三期に分けられよう。B・C類及びD類そしてE類である。

B・C類は、羽釜出現以前のものとして把握しておきたい。煮沸用具は、コの字カメと脚付カメを含む小型カメである。B類には椀類にA類の技法が残る。C類では蓋が消滅し小型カメが出現する。

D類は、羽釜灰釉陶器の住居内への持込みが一般化する時期として把握したい。ここでは、遺物全体に粗雑化傾向が認められ特に須恵器高台椀に著しい。この傾向は次のE類にも続くと思われる。灰釉陶器は、ほとんどがO53期のものと思われ、胎土から産地は三地点推定され、その一つは東濃系であろう。

(2)　主軸方位による類型と遺物による類型の関連について（第22図参照）

本調査地域にあって比較的遺構が集中し、かつ広範囲の調査が可能だったL区における国分期の竪穴住居の主軸方位と遺物との関連についてふれる。第21図を参照されたい。

図によると、方位による類型は、ほぼ二つに分かれ、それぞれほぼ遺物による類型と対応している。すなわち、「○→○・×→×」のパターンが成り立つ。これは、3類に対してC類が、4類に対してD類との対応関係に概ね相当する。

また、遺物類型毎に各住居の配置を見ると、C類に不規則な面が見られるが、ほとんどの住居が西に開く半円上に立地しており、居住地の選定上興味深い。

(3)　小　　結

E類の土器は、それを出す住居の覆土上に浅間山起源のB軽石層[注6]があり、床面との間層に中

があるため11世紀後半より下り得ないと思われる。また、土釜、カワラケ状土器の出現は11世紀初頭と推定されている。[注7]

次にD類であるが、羽釜[注8]の出現時期がD類の時期の上限となる。一方、27号住居出土の坏（14図－12、13、14）の類似例を見ると、上野国分寺[注9]隣接地域では10世紀代、埼玉県上里村[注10]田中前遺跡では10世紀中頃に位置づけられている。

A類は、上野国分寺隣接地域発掘調査報告記載の遺物類型「B類」に相当すると思われ、「B類」は8世紀に比定されている。本遺跡B・C類は、A類後、D類以前に位置づけられ、B類をその前期、C類を後期に位置づけられよう。

このように見ると、A類を奈良時代、B類C類を平安時代中期以前、D類E類を平安時代中期から後期と概略見ることができ、A類B類C類D類E類の順に変化するものと考えられよう。また、E類の下限は、一応11世紀中半頃と考えておきたい。

Ⅳ　結　　び

本遺跡は、奈良時代平安時代の竪穴住居跡を中心とした遺跡であった。L区及びMの竪穴住居を見るとA類に属する一連の住居群は、M区とL区の南側の谷に近い所に位置していた。一方L区のD類に属する一連の住居群は、西に開く半円上に分布しており、半円の内側は空白地になっていた。C類の住居群ではバラつきもあるが、先きの空白地は意識されている様子があり、やはり傾向としてD類の住居群が分布する半円にほぼ一致した半円が想定される。同一時期に何軒の住居が存在していたか特定はできないが、C類からD類へと住居群の継続が推定される。L区M区において、B類及びE類の遺物を伴う住居が検出されなかったが、この点も居住地の選択上興味深い。

E類の遺物を伴う住居はI区で2軒検出されている。（1号2号住居）この2軒は、住居の構造、出土遺物の面で共通点が多い。特にこの2軒はカマド内壁に瓦を使用している点が注目される。瓦を伴う住居は54年度[注11]にも1軒検出されている。瓦を伴う住居は非常に数が限られており、数量的には特殊な存在である。2軒あるE類の遺物を伴う住居双方より瓦の出土があり、E類住居では瓦の使用が一般的であった可能性も残されているが、資料的な根拠に欠け、やはり特殊な存在として捉えられよう。いずれにしても、本遺跡の南方約2㎞にあった国分寺国分尼寺及び山王廃寺との何らかの関連が想定されよう。

トウノコシでは東覚寺と直接関連付ける遺構遺物は認められなかった。仮称トウノコシ遺構は、発掘担当者の乏しい知見ではその性格をつかむことができなかった。先学諸兄の御指導を給われば幸いである。

最後に、真夏の炎天下発掘調査に協力して下さった方々、本概報作成の上で有益な指導助言を給わった方々に対し、紙面を借りて感謝申し上げる次第である。

注１　総社町誌、前橋市史第１巻に東覚寺の記事が詳しい。

注２　「南佐久の口碑伝説」によれば、永禄９年箕輪城攻めの時という。

注３　南佐久郡誌による。

注４　本調査に並行して群馬町教育委員会がトウノコシの南隣接地を調査している。

注５　井上唯雄、1978「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』８、群馬県教育委員会1979「上野国分寺隣接地域発掘調査報告」を参考にさせていただいた。

注６　天仁元年（1108）降下説に従う。

注７　前掲注５「群馬県下の歴史時代の土器」

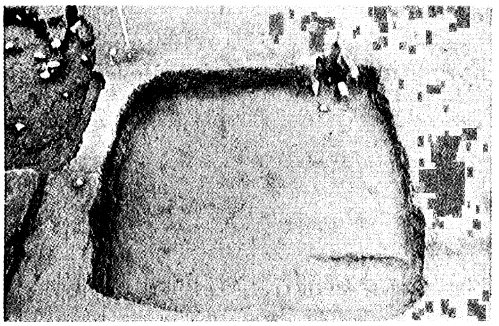
注８　前掲注７では９世紀後葉、前掲注５「上野国分寺隣接地域調査報告」では10世紀、高橋一夫　1975「国分期土器の細分・編年試論」『埼玉考古』13・14では９世紀後半、埼玉県遺跡調査会　1977「田中前遺跡」では10世紀前半

注９　前掲注５「上野国分寺隣接地域調査報告」遺物類型「Ｄ類」

注10　前掲注８「田中前遺跡」編年Ⅴ期１Ｄ４類

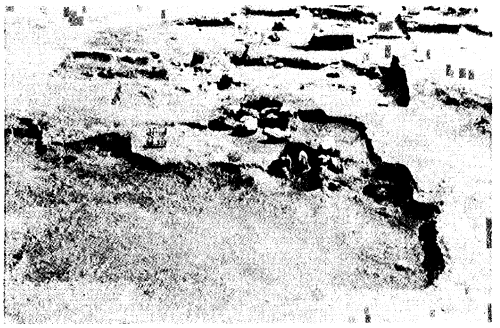
注11　前橋市教育委員会　1980「富田遺跡群　西大室遺跡群　清里南部遺跡群」清里南部遺跡群１号住居

写真版　1

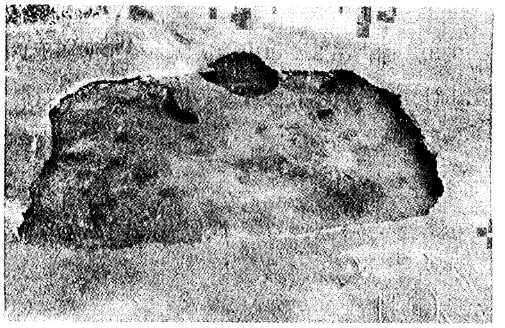


1．1号住居跡

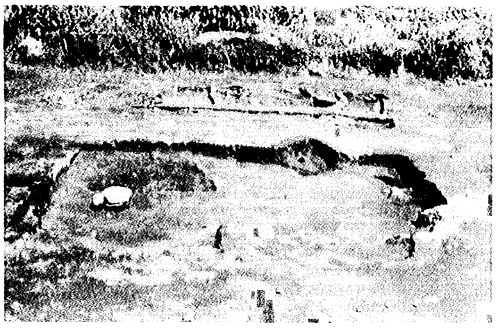
2．1号住居カマド遺物出土状況



3．10号・11号(手前)・22号・23号・24号
25号(向側)住居跡



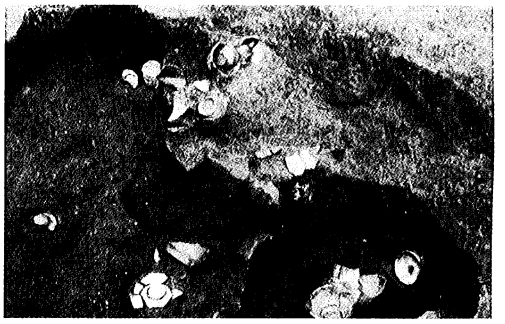
4．13号住居跡



5．16号住居跡

30号住居跡

27号・33号住居跡



27号住居遺物出土状況

写真版　2

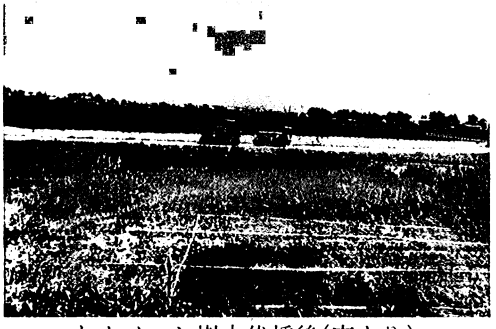
L 区 遠 景

M 区 遠 景

34号住居跡

37号住居跡

トウノコシ現形



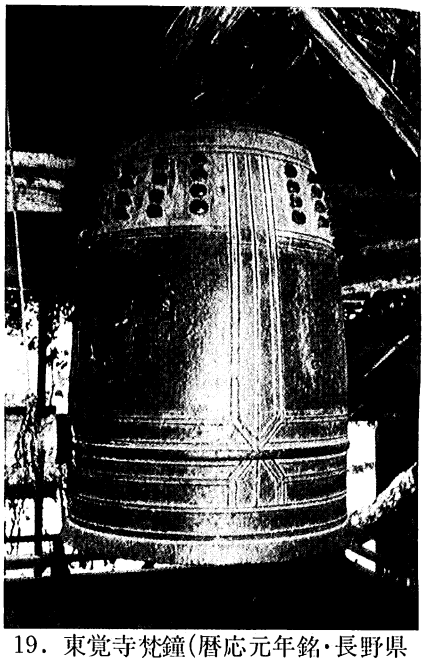
トウノコシ樹木伐採後(南より)

仮称トウノコシ遺構(南西より)

仮称トウノコシ遺構(南より)

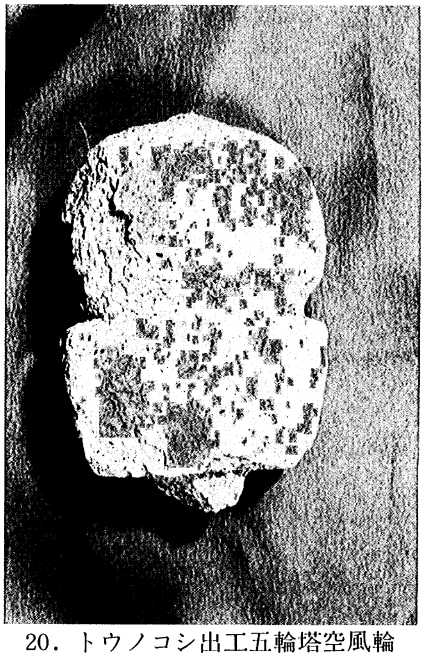
写真版　3

17．伝東寺輪廻塔
（明応四年銘・光厳寺墓地内）



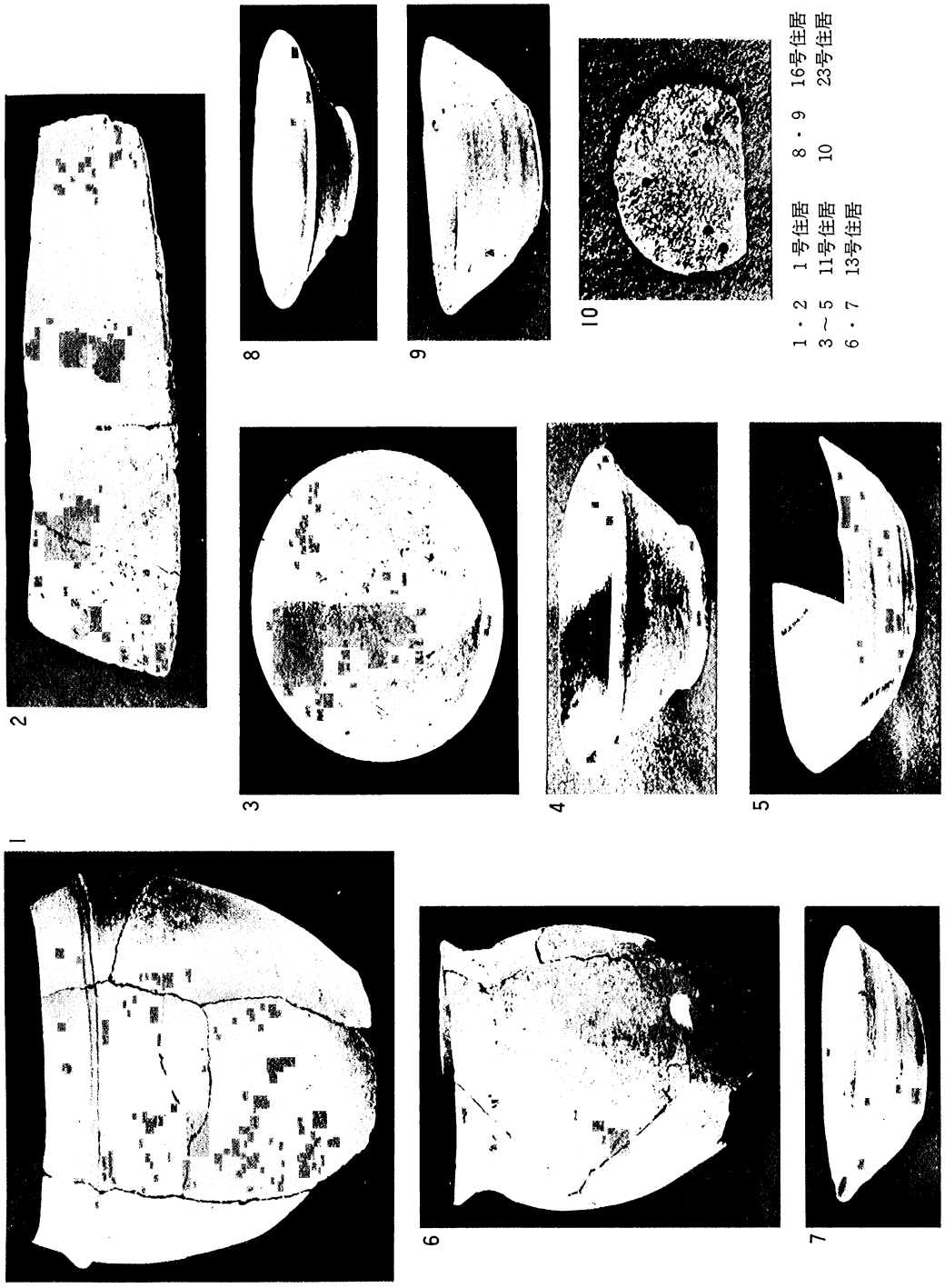
19．東覚寺梵鐘（暦応元年銘・長野県臼田町上宮寺）「上野国群馬郡」の銘文が見える

18．伝東覚寺層塔（光厳寺境内）



20．トウノコシ出工五輪塔空風輪

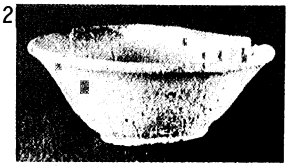
写真版　4

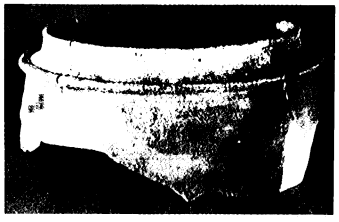


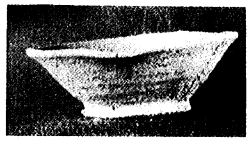
1・2　1号住居　　8・9　16号住居
3～5　11号住居　　10　　23号住居
6・7　13号住居

写真版　5

11

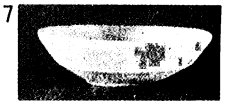
12


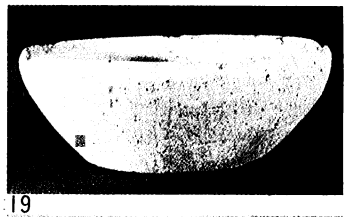
13


14


15

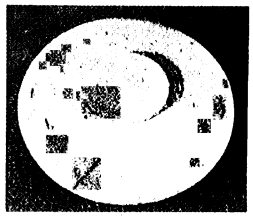
16

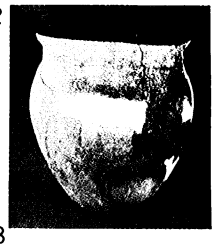
17


18


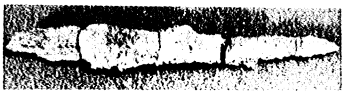
19

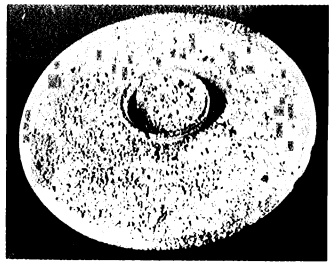
20

21


22


23

24


25


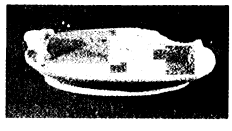
26

27

28

29

30

31


11・12　23号住居
13～17　27号住居
18～21　29号住居
22・23　30号住居
24・25　33号住居
26～28　34号住居
29～31　37号住居

清里南部遺跡群(Ⅲ)発掘調査概報

昭和56年3月25日　印刷
昭和56年3月31日　発行

発　行　　前橋市教育委員会
印　刷　　朝日印刷工業株式会社